

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 年報 2013

L

&

C

bulletin

vol. 5

contents

02	巻頭言 「研究科の現状と将来展望」福田 真人
	イベント紹介
03	・国際シンポジウム “Race and Ethnicity in American Literature and Culture: A Reconsideration” (「人種・エスニシティとアメリカ文学・文化—再検討」)長畑 明利
04	・国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説Ⅲ」張 雅婷
	著作紹介
05	・村主 幸一著『シェイクスピアと身体—危機的ローマの舞台化』(人文書院 2013)
06	・松岡 光治(編訳)『ヴィクトリア朝幽霊物語(短篇集)』(アティーナ・プレス 2013)
07	・木下りか著『認識的モダリティと推論』(ひつじ研究叢書 言語編 2013)
	研究報告・近況報告
08	・コーパスに基づく日本語語彙学習順序の研究 —近況報告を兼ねて— 松下 達彦
09	・留学生と日本 許 夏玲
	新任教員挨拶
10	・「卒業から20年、新しい職場で」小川 明子 (国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル論講座 准教授)
11	・「筑波から韓国とスコットランドを経て名古屋に至るまで」宇都木 昭 (国際多元文化専攻 東アジア言語文化講座 准教授)
	2013年度オープンキャンパス・ポスター発表
13	・カテゴリ—帰属表現の働き—名詞修飾表現の考察を通して— 梶原 彩子
14	・情報の共有と日本語—日本語の「自己」は言語にどう現れるか— 鈴木 梓
15	・韓国語の文末名詞化構文の出現可能性と意味拡張—日本語の文末名詞化構文との対比を通して— 呉 守鎮
16	・「欠落性のある女性を物語る「僕」の語り」—『ノルウェイの森』の直子を中心に— 季 超
17	・韓国人日本語学習者の日本語摩擦音における音的な長さコントロールについて —文字の読み上げと遅延反復手法 (delayed repetition technique) による生成調査の比較— 曹 秀弦
18	・ワーキングメモリ容量と第二言語の習熟度との関係性 二口 和紀子
19	・アン・プロンテ 『ワイルドフェル・ホルの住人』における「サバイバル」 —ヘレンの3つの自己、妻・母・クリスチャン— 齊場 真由美
20	・『人間喜劇』における「におい」—バリの悪臭空間を中心に— 棚橋 美知子
21	・リービ英雄における中国像の変遷 張 雅婷
22	・『ソルプのクラブパート伝説』にみる共同体と他者性 伊藤 惟
23	・表層に浮かび上がらなかったカーソン・マッカーズの意図を探る —作品を音楽の表象から見る— 岩塚 さおり
24	・高行健の隠逸思想について—長編小説『霊山』を中心に— 侯 玉夢
25	・Fanny Mendelssohn Hensel とサロン活動 米澤 孝子
26	・The Role of Social Media as a Tool of Communication for Marginalized Groups: The Case of <i>Viva Favela</i> Eulalia Vasconcelos
27	
28	2012年度提出修士論文題目 一覧表
29	
30	2012年度提出博士論文題目 一覧表
31	
	2012、2013年度提出博士論文 選(要旨)
33	・『方丈記』における「閑居」の世界—〈仏〉〈隠〉融合の視点から— 田 云明
34	・「中国清末民初期の修身教科書と日本」 方 光鋭
35	・「イギリス映画産業の「第三の道」: プレア政権時のクリエイティブ産業政策をめぐる歴史的考察」 木村 めぐみ
36	・「幕末・明治初期における「諫言」の変遷と終焉—下級武士の忠誠観を中心に—」 頼 鉦菁
37	・「官約移民「後藤潤」像の変遷—ハワイ日系社会黎明期の記憶をめぐって」 堀 江里香
38	・ <i>Givers in Exile: Americanization, Gender, and Reciprocity in the Works of Anzia Yeziarska</i> 本田 安都子
	新入生抱負を語る
39	・「知っているのに使えない?」日本人の英語を科学する~日本人・フィリピン人・韓国人と比較から~ 山田 貴将

「研究科の現状と将来展望」

福田 真人

(国際言語文化研究科 研究科長)



苦しい台所事情

実は、大学は苦しんでいる。かつての太平の世は終わったと言っても良いかもしれない。何よりもグローバリゼーション、国際化の大波が襲いかかって来ている。

日本の大学は、これまであまり考えてこなかった世界標準という尺度を突然目の前に差し出され、それに合うかどうか試されている。大学ランキングはその典型か。

世界と互角に戦えと尻を叩かれるのだが、大学運営交付金は年々縮小を続けている。それと同時に、経営努力をせよと、要求されている。象牙の塔という言葉は、もう死語なのか。

院生が溢れ、勤め口がない。オーバー・ドクター問題である。将来がないと悟れば、聡い学生は、大学院などに進む訳が無い。私企業での、手取り早い給与を選ぶ。40、50歳になっても家庭が営めない人間に将来は無いらしい。少子高齢化以前の問題である。

大学教員になったはなつたで、教員の研究と教育に捧げる時間は確実に減っている。雑務が、山と待っているから。以前には曖昧だった「計画と評価」という言葉が大学を席卷している。これらの嵐は、シラバスから始まった西欧の大学仕様との標準化、まず長期・中期計画という言葉に繋がり、今度はついに評価の順番に来た。学生からの評価、自己評価、対外評価。その内、周囲の企業、企業からの指導教員評価というのも出てくるだろう。

一方で、「科学立国」という言葉が平然と囁かれる。言語も文化も無縁らしい。

天文学はまだしも新星の発見があるが、人文学は、技術も金も生み出さない。ブラックホールの解明もない。考古学的発見には、歴史書の書き換えと、せいぜい観光客集中の可能性しかない。ましてや文学においては、小説の一節を批評的に分析してみせて、誰を養

う事ができるのか、と真顔で問われると答えに窮する。

明るい未来

学問に明るい未来はあるのか。この問いに答えるのは難しい。人文学に未来はあるのか、という問いにも、しばしば慄然とさせられる。いまだかつて言語が不要であった時代も国もない。また、人文学が蔑ろにされることはあっても、どのような国、地域においても、文化は重要な財産のひとつである。いわく、歴史的な文化、生活文化、ポップカルチャーなどなど。

学問に未来はあるのか、と問われれば、私は、あると信じている。

私は、ここで[Nobless oblige]という言葉、少し別の意味で使ってみよう。元来の意味は、高い身分に伴う義務、とでもいうほどの意味である。しかし、これを、勉学、研究するという特権を与えられたものが、当然、よりよく研究し教育するという義務を負うべきだと考えるべき、とも使える。

近年よく耳にする話に、蟻と蜜蜂の話がある。全体を10割とすると、その内2割がよく働き、6割が普通に働き、残りの2割が働かないとされる。ところが、このよく働く2割の部分を取り除くと、なんと残り8割のうちの2割が、突然働きだすとか。

また逆に、このよく働く全体の2割の蟻だけを集めると、その内の2割は自動的に働かなくなるとか。

このように集団としてバランスを保って、集団の存続をより長くする知恵とメカニズムが働くようになってきているというのだ。さて、研究も教育もいい加減な人を、どのように働かすかを考えるよりも、そうした人たちの役割を、人間の造った組織が永続するような、いわばたるみ、ゆるみとして実に高度に重要な役割を果たしているとして、逆に感謝し、

報償すべきものであるのかしれない。

すると、計画、分析、評価像にいささかの歪みが生じざるをえない。初めからテキトーであることが、逆に組織の存続におおなる貢献をしている事もあるという立場に立つと、なんだか滑稽にもみえてくる。

高い目標は望ましいし、人間の改善、改革の意思を満足させる。しかし、この怪しい2・8理論に立つと、ちょっとゆるめの計画、評価が望ましいのかもしれない。ふと立ち止まって夕日を見、道端の小さな花に目を止め、蟻の列に声援を送るのもいいのかも知れない。

人間に立ち返って

私は、けっこうテキトーな人間だが、よく無事に生きて来れたと思う事が少なくない。しかし、威信を無くす事はあっても、威厳だけはなくさなかつたな、と思う。

威信(prestige)とは、つまり名望や地位の属性であって、威厳(dignity)とは、人間が本来失ってはならない尊厳である。とにもかくにも、人間の徳性の最低線を守るという事だろうか。

テキトーだが、しかし、けっこう一般性のないテーマを変わずに追及し、またそれを教えて来た。どれくらいインパクトがあったか、それが、文化や教育の裾野を豊かにしたか、などということも考えた事がない。しかし、目的も効果も考えずにしゃにむに追及する事こそが、必要なのかも知れない。

目的と効果を全面に出した時に、その功利的態度がもたらすものは何なのか、世界との距離はまだ縮まっていないかもしれないが、日本の、また名大の独自の尺度と取り組みがあってもいいのではないかと考えている。

「国際言語文化研究科の興廃この教育と研究に在り、各員一層奮励努力せよ」

イベント紹介

国際シンポジウム “Race and Ethnicity in American Literature and Culture: A Reconsideration” (「人種・エスニシティとアメリカ文学・文化——再検討」)

長畑 明利 (国際多元文化専攻 アメリカ言語文化講座教授)

「名古屋大学アメリカ文学・文化研究会」は、国際言語文化研究科プロジェクト経費の助成により、3月16日(土)と17日(日)に、全学教育棟北棟大講義室にて、国際シンポジウム “Race and Ethnicity in American Literature and Culture: A Reconsideration” (「人種・エスニシティとアメリカ文学・文化——再検討」)を開催した。「名古屋大学アメリカ文学・文化研究会」は、国際言語文化研究科国際多元文化専攻でアメリカ文学・文化を研究する教員・大学院生および同専攻修了生を中心に2011年に設立されたもので、2012年3月には、今回と同じく研究科プロジェクト経費の助成を得て、国際シンポジウム “Revisiting the Great Depression in American Literature and Culture” (「大恐慌とアメリカ文学・文化——再訪」)を開催した。

2012年3月の国際シンポジウム同様、今回の国際シンポジウムも、アメリカ文学・文化に関する特定のトピックの再検討を試みるとともに、名古屋大学と中部地区在住の大学院生および若手研究者(国際言語文化研究科院生および修了生を中心とする)に、英語による研究成果発表の機会を提供し、国内外で活躍できる研究者育成に寄与することを旨とする。

初日(3月16日)午前は、南カリフォルニア大学の Viet Thanh Nguyen 准教授と華師範大学の羅良功教授による2件の基調講演があった。グエン准教授の演題は、“Transpacific Studies: Interventions and Intersections” (「環太平洋研究——介入と交差」)で、氏は、種々の具体例を挙げつつ、アジア系アメリカ文学・文化研究を「環太平洋」という文脈に置くことの意義と注意点を論じた。羅教授(写真左)は、“A



Connection with Nature: On Sonia Sanchez's Haiku Poems” (「自然とのつながり」——ソーニャ・サンチェスのハイクについて)と題された講演で、アフリカ系アメリカ人詩人サンチェスによる英語ハイクの諸例を分析するとともに、そこに見られる文化横断的意義を論じた。2件の基調講演は、人種とエスニシティに注目して行われるアメリカ文学・文化研究のあり方について、また、そのアプローチがもたらす新たな研究の可能性について、数々の有益な知見を提供するものであった。

午後には中部地区および日本の他地域からの参加者による報告8

件が行われた。そこで採り上げられたのは、中国系アメリカ人作家 Maxine Hong Kingston、ハワイの劇作家 Dennis Carroll、日系アメリカ人作家 Hisaye Yamamoto (2件)、ベトナム系アメリカ人詩人・作家 Linh Dinh、インド系アメリカ人作家 Bharati Mukherjee、ベトナム系アーティスト Pico Nguyen-Dui、そして、アジアおよび日本でアジア系アメリカ研究を行うことの意味であった。

2日目(3月17日)の午前には、グエン准教授(写真)を講師とするセミナー “Just Memory” (「公正な記憶」)が行われた。はじめに、グエン准教授による報告がなされた。その中で、氏は、様々な記念碑の例を紹介しつつ、ベトナム戦争をめぐるアメリカ側、ベトナム側



双方の記憶のあり方について論じた。従来、アメリカ研究において、ベトナム戦争の記憶はとくくアメリカ側の視点から語られる傾向にあったが、氏の報告は、ベトナム側の視点を提供することで、これまでの視点の偏りを修正することに貢献するものであった。グエン准教授の報告を受けて、参加者間で活発な意見交換が行われた。

同日午後には、前日に続き、中部地区および日本の他地域からの参加者による7件の報告があった。具体的トピックは、アメリカの南部作家 Carson McCullers、ユダヤ系アメリカ人作家 Anzia Yezierska、アメリカの児童文学作家 Jean Webster、コミック作品 *Zippie the Pinhead*、黒人音楽に見られる仮面のテーマ、Andy Warhol、アメリカ文学・文化における仮面のテーマであった。

2日間のプログラムを通じて熱心な討議が行われ、人種とエスニシティに注目したアメリカ文学・文化研究のあり方について、また、21世紀におけるアメリカ文学・文化研究の新しい方法論について、有益な意見交換がなされた。

国際シンポジウム 「マイノリティ状況と共生言説Ⅲ」

張 雅婷

(国際多元文化専攻多元文化論講座 2013年博士後期課程満期退学)



国際言語文化研究科の先生方(柳沢民雄教授、藤井たぎる教授、田所光男教授、水戸博之教授、長畑明利教授、布施哲准教授、鶴巻泉子准教授)を中心とする学際的・国際的研究グループは、4年間にわたる日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)「20世紀における多様なマイノリティ状況の解明と共生言説の検討」の締めくくりとして、3月11日(月)と12日(火)、名古屋大学文系総合館カンファレンスホールにおいて、国際シンポジウム「マイノリティ状況と共生言説Ⅲ」を開催した。

はじめに田所光男氏がこのグループの構築してきた新しい総合科学「比較マイノリティ学」の今後の方向性について説明を行ない、それを受けて、海外の研究機関に所属する4名の先生方による基調講演、及び、国内の研究者・大学院生5名の研究発表があった。

フランスから招聘されたお二人は、比較文学・芸術論の分野の専門家であり、パリ13大学教授アンヌ・ラリュ氏は、「『Hリスト』: ダナ・ハラウェイとSF文学の政治」というタイトルの下、SF文学に描かれる女性のサイボーグ化とその政治性の問題を考察した。特に、家父長制やオイディプスの束縛を超克するために、ハラウェイが『サイボーグ宣言』で示唆する人間と機械の接続といった政治的SFあるいはポリティック・フィクションが有効であることを主張した。パリ13大学准教授マルク・コペール氏は、「シュールレアリストグローバル化された世界におけるマイノリティ行動」というタイトルで、シュールレアリスム運動がこれまでに辿った軌跡について考察を展開した。とりわけ、その運動が決して一枚岩的な結合を保ってきたわけではなく、内部に様々な亀裂を孕んでいたことが豊富な資料を使って解明された。

中国とマレーシアから招聘されたお二人は、民族的マイノリティを対象に社会学的考察を行った。内モンゴル大学准教授ハスエリドン氏は、「中国における民族教育の行方—少数民族に対するバイリンガル教育政策の理念と実践をめぐって—」というタイトルの下、政府が掲げる民族教育政策理念と少数民族バイリンガル教育の実践現場との間に生じつつある乖離を考察した。マラヤ大学上級講師ウォン・ガンリン氏は、多民族国家マレーシアのインド系マレー人を対象に行ったインタビュー調査に基づいて、「インド系マレーシア人のアイデンティティ」の現状を分析した。

国内の研究者としては、愛知学院大学准教授の柴田哲雄氏が、日中両国における優生思想の展開を考察する「国家的危機における優生学—永井潜と潘光旦」を発表した。また高峯氏(日本学術振興会特別研究員)は、「『無法松』への想像力—小説『富島松五郎

伝』および映画「無法松の一生」を中心に」というタイトルで、原作や映画を通してなぜ人力車夫の「無法松」が「国民的物語」になったか、その経緯を検討した。

両日とも本研究科所属の博士後期課程学生による研究発表も行われた。加野泉氏は、「就学前教育政策に見る共生言説」というテーマ

で、米英両国で低所得者層の子供たちを対象に実施されたヘッドスタート(Head Start)という就学前教育政策の比較を通して、目標として掲げられた共生社会の概念を検討した。張雅婷は「リービ英雄「国民のうた」にみる知的障害者表象—家族関係の変化に着目して—」と題して、障害児の弟の誕生に伴う父の逃避的な態度と母の献身的な世話という家族関係の亀裂の体験が、文学創造にどのような影響を及ぼしたかを考察した。さらにイザベル・ビロドー氏は、「文芸書籍における「訳者あとがき」の存在意義—標本調査から見える訳者後書きの役割—」と題して、「訳者あとがき」において日本の翻訳者が行う「解題執筆活動」を国際的視野で検討した。

以上のように、本シンポジウムでは、文学、芸術、民族、教育、職業など多くの領域にまたがる幅広い視点で「マイノリティ状況と共生言説」が検討され、マイノリティであることに潜在する抵抗力、想像力、及び可能性が提示されたことは、極めて有意義であった。また来場者との質疑応答も活発に行われ、大変充実したシンポジウムとなった。

周知のように、2011年3月11日に起きた東日本大震災や福島原発事故によって新たなマイノリティ状況の問題が提起されている。二年後の同じ日に、本シンポジウムでマイノリティ状況から新たな共生を模索するという切実な課題について討論できたことは、格別意義深いことであった。

本シンポジウムの基調講演・研究発表を中心にして、学術誌『比較マイノリティ学』第4号が、2013年3月末に発行された。各研究の詳しい内容については、是非、この雑誌をご覧いただきたい。



『シェイクスピアと身体——危機的ローマの舞台化』

(人文書院、2013)

村主 幸一 著

(国際多元文化専攻 ヨーロッパ言語文化講座教授)

本書は、シェイクスピアによる『タイタス・アンドロニカス』『ジュリアス・シーザー』『コリオレーナス』『アントニーとクレオパトラ』の四作品を扱う。劇作家は、ブルタークが語る英雄たちの物語から出発しながら、すぐにそれとは異なる方向へと、演劇的な方向へと、役者の身体、登場人物の身体、観客の身体的感受性などを利用して、まったく彼独自の演劇的世界を創造した。本書は、ローマの危機を舞台化するに際し、どのようにシェイクスピアが身体的観念また演劇的身体資源を活用したかを探る。

学生：先生の最新刊はシェイクスピアのローマ史劇を論じたものなんですわね。

先生：そうだよ。でも、拙著ではローマ史劇という通りの良い名称は避けている。

学生：どうしてですか。

先生：いわゆるローマ史劇には、従来、ある程度決まったアプローチがあるからなんだ。簡単にいうと、エリザベス朝におけるギリシア・ローマの古典受容を背景にシェイクスピア作品を捉えようとする。

学生：先生はその伝統的なアプローチを取りたくないの、ローマ史劇という名称を使わないのですね。

先生：そうなんだ。むしろ歴史的な身体観、また演劇的な身体的資源に焦点を当てたい。

学生：ちょっと待って下さい。先生はいま二つの資源をあげられましたね。それら二つの関係についてはどのようにお考えですか。

先生：良い質問だ。私は、メディアとしての演劇の特性を重視したいと思ったんだよ。演劇を構成するいくつかの要素、例えば、役者の肉体、観客の身体的感受性などだ。

学生：物理的な構造物としての劇場は身体性と関係がありますか。

先生：大ありだね。劇場の構造、舞台の広さ、観客との距離などは、役者が感覚的に自己の肉体に内在化させねばならない要素であるはずだ。劇作家もまた、自分が書く台本は、そのような役者が舞台化するのだという理解をもっていたらう。演劇がこのように身体的なメディアであるなら、それだけまた、当時の身体観が演劇的展開を与えられやすい。

学生：先生は、シェイクスピアの言葉がもつ身体性にも注意を向けておいでですね。

先生：その通り。現代人にはたんに比喻表現、装飾的な言葉の彩と見えるものも、もっと物質性・身体性に富んだものであったと、身体史から教えられる。

学生：脈絡から外れた質問ですが、そもそも先生の最初のシェイクスピアとの出会いについて教えてください。

先生：脈絡から逸れやすいというのは学生の特権だろうか。ままいい。『鉄腕アトム』だよ。

学生：えー！『鉄腕アトム』ですって？？

先生：その漫画に『ロミオとジュリエット』を翻案した箇所があるんだ。その結末は、いがみ合う親たちが出動させた戦闘用ロボットによって、恋人たちが、これもロボットなんだが、鉄腕アトムの救出の努力にもかかわらず、両サイドからプレスされ、鉄塊になってしまう。この漫画の最後のコマが忘れがたい。鉄塊のなかから一つになったハート型心臓が発見され、アトムが耳を澄ますと、「鼓動」が聞こえる。

学生：なるほど。ついではなんですが、僕はローマ史劇を読んだことがないので、『ロミオとジュリエット』で、先生の今回のアプローチを説明していただけませんか。

先生：出血大サービスと言いたいところだね。この劇は、『鉄腕アトム』で見たように、恋愛物語として神話化しているといってもいい。だが、「死」をひとつのテーマと考えることができる。二つの家の絶えない争いは、日常的に死体を生産しているはずなのだが、このヴェローナのまちは意外にクリーンだ。

学生：ええそうです。ある批評家は、この劇で観客が感じとる身体的感覚は、「スピードと闘争の心躍る第一級の運動感覚」と言っています。

先生：よく勉強しているね。死は意外な方法で、この劇に侵入してくる。ティボルトを殺害したロミオは、大公エスカラスの温情によって処罰を減刑され、彼は追放の刑に処せられる。しかし、死刑か追放かという司法上の選択は、追放と死とを、詩的に等価なもののみならずための工夫ではないかと思える。ロミオの演劇的死の一つの表現は、三幕五場途中から五幕一場冒頭の間、彼が舞台から姿を消すことだ。そしてロミオが「死」として舞台から消失したために、逆説的に彼は「死」として、舞台に充満する存在となる。

学生：充満するとは、仮死の状態に陥ったジュリエットと結婚したのは死神だという人々のレトリックがロミオを示唆するからでしょうか。

先生：なかなか勘がいいぞ。恋人たちにはエロス化された死の伝統が下敷きとしてある。さらには死神は男性なのか女性なのかといった関心も劇には存在する。その典拠は創世記に記された原罪の解釈だ。死の気配の充満は「死んだ」存在となったロミオが、観客の想像力のなかでヴェローナの町境を何度も横切ることにもよるんだ。

学生：まさにシェイクスピアは肉体運動しながら、思考し創造する劇作家ですね。

先生：君のような学生は教えがいがあるよ。なぜこの劇において「死」のテーマがクローズアップされているのか。恐らくそれは、この劇の若者たちの生命力に溢れた肉体とその俊敏な運動とに对照的な舞台印象を形成するからだと思う。このような演劇的思考の背景に身体史的な基盤が隠れている。だいたいこのようなことが拙著の関心分野なのだよ。

学生：村主ワールド全開ですね。

先生：またまた。



『ヴィクトリア朝幽霊物語（短篇集）』
（アティーナ・プレス、2013年）

松岡 光治 編訳

（国際多元文化専攻 ヨーロッパ言語文化講座教授）

本書は、この5年間に名古屋大学の教養英語でテキストとして使用した28篇のヴィクトリア朝幽霊物語から、恐怖と緊張で一気に読ませるような面白い8篇を選んで訳したものである。文庫本の翻訳としては、2000年に岩波文庫から出した『ギャスケル短篇集』以来なので、13年ぶりの出版となる。両者の最大の違いは、前回の組版をプロの出版社に任せただけに対し、今回は全部を自分でやった点にある。普通の出版社であれば、一般読者を意識してであろうか、漢字を減らせ、ルビを使うな、訳注は短い割注で、作品の解説は最小限で、といった様々な制限がつく。それで、今回は自分の好きなようにするために、専用のレイアウト・ソフト（Adobe InDesign）で作成した版下（入稿はPDF）を地元・金山の小さな印刷・製本会社に渡した。一昔前であれば、こうしたことは不可能であったと思うが、新しいソフトの開発で素人に毛が生えたような者でも可能になったわけである。発行部数が多い場合のオフ・セット印刷と違い、500部ほどの場合はオン・デマンド印刷（プリンタを大型高速化させたデジタル印刷）となる。しかしながら、印刷の仕上がりに大きな差はない。差があるのは、1万部ほど印刷する岩波文庫の時と違い、今回は1冊（定価800円）の印刷・製本に650円もかかった点だ。とはいえ、幽霊関係はマニアも多いようで、ブログやツイッター経由で広がり、少数部だったがアマゾンでは（1冊あたり手数料を4割ほど取られるものの）1ヶ月で品切れとなった。以上、世俗的な話ばかりで申し訳ないが、今回は象牙の塔から出て、本当に珍しい経験をさせてもらった。売れない学術書や文学書は自費出版とならざるを得ないが、自分で版下を作成すると出版費用は少なくとも半額以下で済むので、試してみる価値はあるのではないだろうか。

ある最近の調査によれば、神の存在を信じている者は2人に1人だが、幽霊の存在については3人に2人だそうである。幽霊を見たことがあると答えた人も12%ほどいる。理性を重んじる主知主義の秩序や調和に対する反動として、粗野で荒々しい感情を喚起する幽霊や奇怪なもの、あるいはそれと連動する異常心理への関心は、ヴィクトリア朝の人々のみならず、現代人の心の中でも消えずに残っているのではあるまいか。ただし、イギリス人の幽霊への思い入れには、世代を超えて継承される懐古趣味や郷土愛のようなものが見られる。その理由としては、幽霊の存在でさえ伝統として重んじ

てしまう保守的な国民性と、それとは逆に一切の因襲的偏見を打破し、無知の状態から自分を解放するという17世紀後半以降に発展した自然科学的な考え方が挙げられる。

本書にはギャスケル、エドワーズ、ブラッドン、ネズビットといった中産階級の女性作家たちの作品が収められているが、幽霊物語の黄金期と言われる19世紀後半において、女性作家が表舞台に出てきたこと、そしてヴィクトリア朝の定期刊行物に掲載された幽霊物語の7割近くが女性作家によるものだったことは、注目に値する。性別役割分担が固定化され、女性の活動が家庭という私的領域に限定され、性がタブー視された近代資本主義下の中産階級において、彼女たちは政治的・経済的な意味で社会の周辺に置かれていたので、周縁化された不可視なもの、抑圧された様々な欲望、憎しみや恨みといった自らの内なる悪について、何らかの形で表現したい気持ちになっていたと考えられる。その主たる表現手段として幽霊物語が着目されたとしても不思議ではない。

女性であれ、男性であれ、欲望を抑圧された自分の分身が、本人だけに見える形で幽霊として現れるというのは、精神分析学で好まれる解釈である。幽霊の夢は無意識に抑圧された体験や出来事の象徴に他ならない。例えば、ディケンズの有名な幽霊物語『クリスマス・キャロル』の主人公である守銭奴のスクルージは、7年前に死んだ共同経営者マーレイの幽霊によって過去・現在・未来の亡霊の訪問を予告される。しかし、子供時代のスクルージが善良な普通の少年だったことを考えると、ヴィクトリア朝の人間関係の基盤としてディケンズの師カーライルが指摘した金銭的結び付き（cash nexus）にしか関心を示さなくなっていたスクルージが、その過程で無意識の世界に抑圧してしまった（イエスの教えを守る）善の分身をクリスマスの時期に呼び起こされ、自分で自分を改心させるために視覚化した超自然的現象——言い換えれば、意識上の悪の行為に対する意識下の良心が可視的に外在化したもの——として幽霊を捉えることができる。

このように本書に出てくるヴィクトリア朝の幽霊については様々な解釈が可能なので、日本の幽霊などと比較して読んでいただければ幸いある。



『認知的モダリティと推論』

(ひつじ書房、2013)

木下 리카 著

(日本語文化専攻 博士後期課程 1999年修了、武庫川女子大学 文学部 日本語日本文学科 准教授)

我々は非現実的な世界について語ることがある。明日の天気、遠く離れた場所で生起している出来事などは、直接認識できないという意味で非現実的である。認識的モダリティ形式「ようだ、らしい、かもしれない、にちがいない、だろう、はずだ、(～し)そうだ」は、このような非現実世界について語る形式である。本書の目的は、これらの形式が、非現実世界をどのように描き分けているのかを明らかにすることにある。

認識的モダリティについては、豊富な研究の蓄積がある。しかし、「だろう」は「蓋然性／推量」を「かもしれない」は「可能性」を表すというように記述されるとき、メタ言語の抽象度の高さが問題となる。相互の関係は曖昧になりがちで、メタ言語それ自体の意味把握も容易ではない。

この問題の解決には、認識的モダリティが表す世界、すなわち非現実世界の認識そのものの特徴を把握する必要がある。各形式を個別に分析する中から見えてきたのは、非現実世界の認識には推論が介在すること、どのような特徴を持った推論を表すのかという視点から各形式を見ることで、体系的な意味の記述が可能となるということである。つまり、本書の提示する推論という枠組みは、認識的モダリティ形式の体系的な意味記述の進歩に貢献する。推論という枠組みの果たす役割はそれだけではない。この枠組みにより、認識的モダリティ形式の意味に、人間の認識や思考を支える基本的な概念が埋め込まれているさまがあぶり出されることになる。演繹、帰納、アブダクションなど、論理学で示されてきた基本的な推論の型は、各々の認識的モダリティ形式を特徴づけている。日常言語の推論を特徴づける暗黙の前提の存在が意識化されていることを体現する形式もある。推論における根拠と帰結との関係を保証する知識は、類似性、含有関係、隣接関係など形式によって異なるが、これらの関係は認知言語学の成果が示すように、多義の意味拡張を支えるなど、人間の認識にかかわる普遍的な知識・能力である。

本書は、10章で構成されている。第1章では、分析の対象とする認識的モダリティと、分析の枠組みとする推論の概念規定を行い、第2章では、論理学、認知言語学などで推論について指摘されてきた特徴の中から、認識的モダリティの分析に有効だと考えられる六つの特徴を取り出し、分析の視点として提示する。各形式の具体的な分析は第3章以降となる。

第1章 はじめに

第2章 認識的モダリティ分析の視点

第3章 証拠に基づく認識

第4章 「広義因果関係」をさかのぼる二つの推論

第5章 「ようだ」の多義的な意味の広がりとはカテゴリー帰属認識

第6章 隣接関係を用いたメトニミー的推論

第7章 日常言語の推論における暗黙の前提

第8章 根拠の非明示性と推論の方向性

第9章 非現実世界の蓋然の特徴と主観性

第10章 おわりに

第3章から第7章は、推論の根拠の特徴を明示する形式についての分析である。第3章では「ようだ、らしい」に共通する「証拠性」という概念を、Sweetser(1990)における認知領域の区分を援用して明らかにする。第4章、第5章では、「ようだ」「らしい」の相違について考察を進め、両形式の間にカテゴリー帰属認識と原因推論という質的な違いがあることを論証する。第6章では、「(～し)そうだ」が隣接関係に基づくメトニミー的推論を表すこと、第7章では「はずだ」の表す推論に、例外の排除という暗黙の前提の意識化がかかわることを明らかにしている。

続く第8章、第9章は、「かもしれない」「にちがいない」「だろう」を主たる考察対象とする。これらの形式は、推論の根拠がどのような特徴を持つのかを明示することはないが、それでもその特徴をとらえる上で本書の示した推論という枠組みは有効である。原因の推論表示の適否は、それぞれの表す推論の型が演繹か帰納かの違いによると考えられる。さらに、主観性(発話時の話者の認識を表すという制約)の強さが指摘されてきた「だろう」についても、その意味を推論という枠組みの中でとらえることで、その特異性の把握が可能となる。

本書は、1999年に名古屋大学に提出した博士学位論文を基盤としている。認識的モダリティ形式と推論とのかかわりという視点は、博士学位論文執筆の指導を受ける中で得られたものである。博士学位論文から本書の出版までには長い年月を経ることになったが、その間、考察範囲を拡大し、分析を深めて記述を精緻化した。本書は、最新の研究にも目配りをし、現時点での研究成果をまとめたものとなっている。

コーパスに基づく日本語語彙学習順序の研究 —近況報告を兼ねて—

松下 達彦

(日本語文化専攻 博士前期課程 1992 年修了 博士後期課程 1993 年中途退学)

名古屋大学大学院では、日本語教育全般について学びつつ、派生名詞句(例:「東京への出張」)など、主に名詞句の用法について研究をしていた。学部生時代に中国に2年間留学していたので、中国語と日本語に共通する漢字語の問題に関心を持っていた。結局、博士前期課程では、日本語について研究するのが精いっぱい、当時多かった対照研究や中国語母語話者の日本語習得などを研究する余裕はなくなってしまった。その後、後期課程を中退して桜美林大学に奉職し、日本語教育に従事する一方、日本語教員養成の課程で語彙論を含めた語彙教育の授業を担当して来て、やがて関心は自然に第二言語・外国語の語彙の学習・教育全般に広がっていった。

2001年から2003年の間、北京とシドニーで半年間ずつ在外研修の機会を得た。その時に研究に邁進する大学院生たちを見ていてうらやましくなり、博士号を取りに武者修行をしようと決意。在籍校(桜美林大学)にも留学の決意を伝えて後任の方を補充していただき、引き継ぎも済ませて、2007年、42歳で円満に退任し、翌2008年から、ニュージーランドのVictoria University of Wellingtonへ留学した。なぜそこへ留学したのかとよく聞かれるのだが、理由は二つある。

一つは、2006年以降、ニュージーランドの大学のPhDプログラムに留学する留学生は domestic status (国内の学生と同じ待遇)が得られるという政策があり、学費が非常に安く(当時のレートで年間30数万円)済んだからである。(結局、2年目から奨学金がもらえたので、学費を払わずに済んだが。)

もう一つは、Victoria University of Wellington には、Paul Nation をはじめとする、一流の語彙教育の研究者が集まっていたからである。第二言語の語彙教育に関するスタッフの充実度は、おそらく世界一であろう。

この充実した環境で背水の陣を敷いて3年半、効率的な日本語語彙の学習順序について研究し、2012年3月に無事に論文を提出し、2013年2月、無事に博士号(PhD)を取得することができた。論文提出直後の2012年4月から、東京大学の駒場キャンパスで日本語教育の職を得ることができ、いまに至っている。

前職を辞した時には、多くの友人が心配してくれたり、大胆だと感心してくれたりした。40代の半ばに5年余りも仕事をせずに学生になるという生き方は日本では珍しいかもしれないが、今後の人生の出発点になる研究ができ、本当によかったと思っている。以下、お世話になった方への報告も兼ねて、博士論文の要旨を記しておきたい。

PhD論文 "In what order should learners learn Japanese vocabulary? A corpus-based approach" (Matsushita, 2012) 要旨

本論文は、1) 日本語を読めるようになるために、第二言語としての日本語の学習者はどのような順序で語彙と文字を学習したらよいか、2) その順序は学習目的によってどのように異なるか、という二つの研究課題について明らかにしようと試みるものである。これらの研究課題に取り組むために、初めに書籍およびインターネット・フォーラムのテキスト約3300万語からなる「現代日本語書き言葉均衡コーパス」2009年モニター版(国立国語研究所2009)に基づき、「日本語を読むための語彙データベース」(第3章)および「現代日本語文字データベース」(第5章)を開発した。これらのデータベースでは、所収の語彙や文字に、留学生用、一般学習者用、一般書き言葉用の異なる3種類のランキングを用意した。これらのランキングが、それぞれ目的とするジャンルで他のジャンルよりも高いテキストカバー率が出ており、有効であることを証明した(第3章、第5章)。

これらの語彙や文字の使用について分析(第4章)をした後、学術共通語彙、限定学術領域語彙、文芸語彙の3種類の領域特徴語を抽出した(第7章)。これらの語群の期待される学習効率を検証するため、「テキストカバー効率」(TCE)という指標を提案した(第7章)。テキストカバー効率とは、ある語群を学習した場合に、単位テキスト長あたりに期待されるテキストカバー率である。したがって、目標テキスト領域におけるテキストカバー効率の値は、その領域においてどのような語群が最も効率的にテキストをカバーするかを示し、その数値の高い順に語彙学習順序を決めることが最も効率的なはずである。実際に、抽出された学術共通語彙と限定学術領域語彙のテキストカバー率とテキストカバー効率は学術テキストにおいて他のテキストよりも有意に高い値を示した。文芸語彙も、学術テキストにおける学術語彙ほどではないが、文芸テキストにおいて他のテキストよりも有意に高い値を示した。上級レベル以上においては、領域特徴語を学習することは、例えば自然科学ジャンルなどいくつかの領域において、より一層効率的であることもわかった。このように、テキストカバー効率が各種の語群間の学習順序を決めるのに有用な情報を提供することが示された(第7章)。

そのほかにデータベースや語彙リストの分析に基づいて明らかになったこととして、分散度や調整頻度を測る各種指標の特徴(第3章)、異なる媒体やジャンルの語彙的な特徴、語種や品詞の分布の持つ指標性(第4章)、語彙学習順序と漢字学習順序の食い違い(第6章)、などがある。また、テキストをよい語彙学習リソースとするために書き直す際の基準として、読解テキスト用語彙学習可能性指標(LEPIX)も提案した(第8章)。

留学生と日本

許 夏玲

(日本語日本文化専攻 博士後期課程 2000 年満期退学)

日本の首都である東京という名高いメトロポリタンシティ及び日本の伝統文化とポピュラー文化の集大成に憧れ、多くの外国人が東京を訪れている。平成24年10月1日付けの「国(地域)別外国人留学生数一覧」(東京学芸大学ホームページ掲載)によると、東京学芸大学へ留学に来ている外国人留学生は、合計326名に達している。

留学生のうち、大学院レベルの留学生が一番多く、計204名、うち国費留学生の教員研修留学生を含め、修士課程及び博士課程の留学生が多くいる。学部レベルの留学生が計122名、うち日本語日本文化研修留学生、短期交換留学生、一般交換留学生などといった国費留学生が中心となっている。一方、国籍で言えば、中国が一番多く、次に韓国、ドイツ、タイ、アメリカ、スウェーデン、台湾、フィリピン、ベトナム、香港、モンゴル、ウズベキスタン、オーストラリア、クロアチアなどの順になっている。

このように、一つの学部の学生数も超えた約300名の留学生を対象に業務を行っている留学生センターは、重大な意義と責任を持っていることは否めない。筆者の勤務先の東京学芸大学留学生センターは、日本語教育部門(担当教員4名)と日本理解教育部門(担当教員2名)の2つの部門に分かれている。今回、留学生を主な対象に実施した交流活動の内容について報告する。

東京に外国人が多く在住しているとは言え、一般の人々は日常外国人と交流できる機会は決して多くはない。日本人大学生も同じような状況になっていると言えよう。学内の日本人学生と外国人留学生とのコミュニケーションを図るため、教員研修留学生の協力を得ることによって大学祭で国際交流コーナー、および海外教育事情のトークを実施した。

また、日本のことに興味を持って遠くの国々から日本を訪れてくる留学生達には、学内の学術交流や文化交流だけでなく、地域の一般の人々とも交流できるチャンスを与えることが望ましい。その方法としては、地域の人々との提携により、日本に関わる伝統文化や社会習慣などを外国人留学生に紹介する方法が考えられる。また、一方的な方向だけでなく、外国人留学生と意見交流をすることによって、外国人の考え方や文化が反映されるため、地域への活性化と還元も期待できるとも考えられる。そこで、東京都の小学校(こども祭り)、小金井市の貫井囃子保存会(貫井囃子ワークショップ)、小金井市シルバー人材センター(俳句鑑賞教室)、小金井警察署(自転車安全教室)、日本舞踊協会(日本舞踊ワークショップ)などとの提携による交流活動を実施した。

日本語学習者の学習動機から見て、「必修科目だから勉強する」「将

来日本企業に就職したい」などの外発的動機付けより、「日本語や日本文化が好きだ」「勉強が楽しい」などの内発的動機付けのほうが学習モチベーションも高まり、長期的に学習意欲が持続できると言われている。言語は文化の鏡と言われるほど、日本語の様相から日本の文化もうかがうことができると考えられる。また、日本文化を理解していない日本語の勉強は本当のコミュニケーションも図れないと思う。

このように、日本語の勉強以外に、日本のどのようなことを留学生達に紹介してあげればいいのかは、実に考えさせられる重要な課題の一つである。



大学祭



藍染めの体験学習



日本語研究会



研究会参加者と修士課程修了生



自転車安全教室



小学校との交流授業



教員研修留学生のトーク



日本舞踊ワークショップ

「卒業から20年、新しい職場で」

小川 明子

(国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル論講座 准教授)



大学を卒業してほぼ20年、まさか自分が母校に戻ることに
なろうとは、思いもしませんでした。大学では文学部で社会学
を専攻し、卒業後、名古屋の放送局に4年勤めたのち、大学院
に進学。テレビとローカル・アイデンティティの研究からス
タートし、ローカル・メディアやコミュニティ・メディア研究
とメディア・リテラシー研究を続けてきました。大学院では他
にも、メディア・リテラシーをめぐるプロジェクトベースの研
究と実践を、メディアの現場の方や教育関係の方々と一緒に行
いました(<http://mell.jp/>)。今あるメディアを自明のものとして捉え
るのではなく、それを分析的、批判的に捉え、その可能的様態
を常に探りながら、研究者以外の人たちとも議論しながら新た
なカタチを模索していく活動は、苦しくも楽しく、また新しい
活動の場を作り上げているのだと感じられる、非常に貴重な経
験でした。

2005年に「デジタル・ストーリーテリング」という活動に出
会い、2008年以降はその実践と理論構築に取り組んでいます。
デジタル・ストーリーテリングとは、普通の人びとが、その想
いや経験、意見等を仲間たちと簡単な物語にして、自分の声と
写真で2-3分の映像を作るというワークショップ型の取り組
みで、英国BBCウェールズで大規模に展開されたのち、現在で
は、国連をはじめ、世界各国で、人びとのエンパワメントのた
めにこの活動が活用されています。活動が展開される領域も、
多様な教育活動から福祉、医療、それに歴史研究や組織経営な
どさまざまです。

私自身も、日本に暮らす日系の子どもたち、留学生、お年寄
り、障がいを持ったかたとその家族、そして福島や東北の大学
生たちと、いかに映像や物語によって互いを理解できるのかを
テーマに、デジタル・ストーリーテリングのワークショップを
行ってきました(<http://mediaconte.net/>)。その際、語ること、
意見を述べることに慣れていない日本人のために、他者との対
話のなかから想いを拾い上げ、物語化していくというプログラ
ムを開発し、今ではそのプログラムをベースに、外国人の子
どもたち向けの実践などが数多く行われるようになりました。今
は、英国の実践家とも協力して、日本でも医療や福祉といった
ケアの領域におけるコミュニケーション・ツールとして用い
られないか、模索しているところです。

非常にシンプルな実践ではあるのですが、その実践のなかか
ら、私自身もメディアとは何か、マージナルな想いを抱えた彼
らにとってコミュニケーションとは何なのかを学ばせていた
だきました。そして今は、そのワークショップや物語を通じて
生まれる共感がなぜもたらされるのかについて、熱狂的に世界
に広がっている状況の分析とともに、メディア論の視座から考
察しています。

この仕事が一段落したら、防災とメディアについての研究
や、独特の展開を見せてきた東海地方のメディア史についての
研究など、やりたい研究、やらなければならない研究に取り組
んでいきたいとおもっています。産学連携という恵まれたポジ
ションをなんとか有効に活用し、教育的にもユニークで活気
のあるプロジェクトを立ち上げていければと思っています。当
面、みなさまにご迷惑をおかけすることもあろうかと思いま
すが、持ち前の責任感と粘り強さで、少しずつでも向上してい
きたいと考えています。国際言語文化研究科という恵まれた
フィールドで、精一杯前向きにがんばりたいと思います。どう
か忌憚のないご意見とご指導をお願いいたします



デジタル・ストーリーテリングのワークショップ風景

「筑波から韓国とスコットランドを経て名古屋に至るまで」

宇都木 昭

(国際多元文化専攻 東アジア言語文化講座 准教授)



今から5年ほど前、私はスコットランドに住んでいた。北のアテネとも呼ばれる古都エディンバラ。天候は最悪だが、中世的な石畳の街並みが広がる魅力的な都市。ポストドクであった当時の私の研究テーマは、韓国南東部・慶尚道方言のアクセントとイントネーションだった。スコットランドにいる日本人が韓国語の方言について研究しているというのは、周囲の人々にはずいぶん奇異にうつったようで、理由をよく聞かれたものだった。

スコットランドから帰国してからは、理化学研究所でポストドクをした。脳科学総合研究センター言語発達研究チームというところが、所属していた研究室だった。「言語発達」ということで、赤ちゃんの脳波実験の手伝いをしたりしていた。脳波実験を行うためには専用のキャップをかぶり実験の間じっとしていなければいけないのだが、赤ちゃんをじっとさせておくというのは容易なことではない。パペットを使って赤ちゃんをあやしたりもした。(今年6月にはじめての子どもが生まれたが、赤ちゃんのいる暮らしになんとか適応できているのは、理研時代にさんざん赤ちゃんに接したからかもしれない。)

さて、このように書いてみると、いったい自分は何者なのだろうかと思ってしまう。少なくとも、今名古屋大学で韓国語を教えている教員の経歴には、とても見えない。

ただ、奇妙な経歴ではあるのだが、やってきたことはそれなりに一貫していると思っている。今から十数年前、筑波大学大学院の一般言語学コースに進んだとき、関心があったのは日本語と韓国語の音声学・音韻論だった。研究テーマに選んだのは韓国語(ソウル方言)のイントネーション。在学中に韓国への留学を経験しつつ、このテーマで博士論文を執筆し、2005年末に筑波大学大学院を修了した(ちなみに、博士論文の改訂版が今年2月ようやく出版された)。博士号取得者の就職が極めて厳しいこのご時世、私はポストドクとしてあちこちを渡り歩くことになった。最初のポストドクは再びの韓国で、ここで研究テーマをソウルから慶尚道へと広げた。次のポストドクは日本学術振興会海外特別研究員で、イントネーション研究の理論と方法論を深めたいと思い、イントネーション研究の世界的な権威がいるエディンバラ大学に受け入れてもらった。

その期間が終わろうとし、異動先が見つからず途方に暮れていたころ、理研の言語発達研究チームに拾っていただいた。音声の発達を重要なテーマとして掲げているこの研究室において、音声学の専門知識が買われたからだった。その後、筑波大学に移って音声学を教えたのち、今年4月に名古屋大学に着任したというわけだ。様々な場所の、様々な機関に身を置いてきたが、そこで何をやってきたかという、結局のところ「日本語と韓国語の音声学・音韻論」という枠内におさまっていたのだと思う。

さて、名古屋大学には、朝鮮・韓国語担当の教員として着任することになった。この大学に韓国語を知っている(あるいはネイティブである)教員は少なからずいると認識しているが、未修外国語としての韓国語を担当する専任教員は私一人ということになる。そのための責任の大きさを考えると、気が引き締まる思いである。

着任して早速授業がはじまったが、とりわけ大学院国際言語文化研究科での授業については、自分のこの大学における位置づけを考えながら行っていきたい。例えば今年度の場合、大学院の授業は前期と後期で扱うテーマを大きく変え、一方の学期は韓国語全般について扱うようにし、もう一方の学期は韓国語を中心とした音声学・音韻論を扱うようにした。前者のような授業を設けたのは、日韓対照言語学をテーマとする大学院生が多く在籍している本研究科においては、韓国語そのものについて言語学的観点から理解を深めるような授業が用意されるべきだと考えたからだ。韓国語学といっても、音声学・音韻論以外の分野は私にとっては得意とするところではないが、受講生とともに学んでいこうという気持ちで授業を進めている。一方で、私の研究室の中心的な課題としてはやはり、韓国語の音声学・音韻論を掲げたい。学際的なこの分野においては、私のこれまでの様々な経験が活かせると信じている。

これまで縁もゆかりもなかった名古屋大学に着任し、まだまだ慣れないことばかりですが、皆様どうぞよろしくお願いいたします。

2013年度オープンキャンパス・ポスター発表

- 梶原 彩子 ・ カテゴリー-帰属表現の働き-名詞修飾表現の考察を通して-
- 鈴木 梓 ・ 情報の共有と日本語-日本語の「自己」は言語にどう現れるか-
- 呉 守 鎮 ・ 韓国語の文末名詞化構文の出現可能性と意味拡張
-日本語の文末名詞化構文との対比を通して-
- 季 超 ・ 「欠落性のある女性を物語る「僕」の語り」-『ノルウェイの森』の直子を中心に-
- 曹 秀 弦 ・ 韓国人日本語学習者の日本語摩擦音における音声的な長さコントロールについて
-文字の読み上げと遅延反復手法 (delayed repetition technique) による生成調査の比較-
- 二 口 和紀子 ・ ワーキングメモリ容量と第二言語の習熟度との関係性
- 斉 場 真由美 ・ アン・ブロンテ 『ワイルドフェル・ホールの住人』における「サバイバル」
-ヘレンの3つの自己、妻・母・クリスチャン-
- 棚 橋 美知子 ・ 『人間喜劇』における「におい」 -パリの悪臭空間を中心に-
- 張 雅 婷 ・ リービ英雄における中国像の変遷
- 伊 藤 惟 ・ 『ソルブのクラバート伝説』にみる共同体と他者性
- 岩 塚 さおり ・ 表層に浮かび上がらなかったカーソン・マッカーズの意図を探る
-作品を音楽の表象から見ると-
- 侯 玉 夢 ・ 高行健の隠逸思想について -長編小説『靈山』を中心に-
- 米 澤 孝 子 ・ Fanny Mendelssohn Hensel とサロン活動
- Eulalia Vasconcelos ・ The Role of Social Media as a Tool of Communication for Marginalized Groups:
The Case of *Viva Favela*

カテゴリー帰属表現の働き —名詞修飾表現の考察を通して—

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本語文化専攻 博士後期課程1年 梶原彩子

1. 研究背景

- 人間のカテゴリー認知のあり方 = 私たちの日常言語に反映
(カテゴリー帰属を表す表現は、その一例)

- ①「周辺例を浮立たせる表現」
- ②「典型例や理想例を浮立たせる表現」

これまで、この2つに大きく括られてきた

2. 研究課題

- 日本語の名詞修飾表現の中から、カテゴリー帰属を表す表現を取り上げる。
- カテゴリー化との関連から、これらの表現が果たす働きについて整理し、考察する。

4. 先行研究

○ カテゴリー帰属を表すヘッジ表現とは？

Lakoff(1972: 471): 2種類のヘッジ表現がある。

- ⇒ ヘッジが命題内容を強調するもの(intensifier)
- 曖昧化するもの(deintensifier)

○ 日本語のカテゴリー帰属表現

今井(2008): カテゴリー帰属を表す「立派な」「完全な」「いい」「下手な」

- ⇒ その意味機能は、基本義からのメタファー的拡張
- ⇒ そのメタファーは、ソースドメインとターゲットドメインの構造的類似性に動機づけ

◆ カテゴリー帰属を表す機能

- ⇒ 典型的には副詞や構文など(×名詞修飾表現)

3. 考察対象

- 子育ても立派な仕事だ。
 - 30代だけど一応、学生です。
 - いい大人が横入りか。
 - 太の男が人前で泣くんじゃない。
- あいつは、相当のワルだ。
 - 今回の件は、(私の)完全なうっかりミス。

5. 考察

■「カテゴリーの周辺例を浮立たせる表現」の働き

A: 対象が周辺の成員であることを認めながら、典型性を高める

- 子育ても立派な仕事だ。
- 30代だけど一応学生です。

- ⇒ ある言語共同体において、対象がカテゴリーの周辺の成員だと認知されていることを認めながらも、カテゴリーの中心に対象を近づけ、典型性を高める働き



B: ヒトカテゴリーの中に新たなカテゴリーを作り出す

- いい大人が横入りか。
- 太の男が人前で泣くんじゃない。

- ⇒ 新たなカテゴリーを作り出すことによって、対象をはき出す働き
(文全体の意味は批判や非難)



示唆: カテゴリー帰属を表す表現の働きは、A~Dのようなものがある。
今後の課題: ①何をカテゴリー帰属表現と見なすか ②語の意味との関連

C: 対象が中心的成員であることを認め、さらに典型性を高める

- あいつ、相当のワルだ。

- ⇒ 対象をカテゴリーの中心により近づける役割を果たし、対象のカテゴリー内での典型性を高める働き



D: 対象が中心的成員であることを認める

- 今回の件は、(私の)完全なうっかりミス。

- ⇒ 典型性を高めたりはせず、対象が中心的成員であることを認める



■「カテゴリーの典型例や理想例を浮立たせる表現」の働き

<参考文献>

- 今井忍(2008)『日本語カテゴリー帰属表現について』児玉一室(編)『言葉と認知のメカニズム—山梨正明教授還暦記念論文集』pp.499-513 ひつじ書房
辻井(編)(2002)『認知言語学キーワード事典』研究社
新山洋介(2010)『百科事典の意味経』山梨正明他(編)『認知言語学論考』No. 9 pp.1-37 ひつじ書房
Lakoff, G. 1972. "Hedges: A Study in Meaning Criteria and the Logic of Fuzzy Concepts." CLS8: 183-228

情報の共有と日本語

－日本語の「自己」は言語にどう現れるか－

How can information affect Japanese view?
-what determines Japanese inner/outer world-

鈴木 林 (名古屋大学大学院D1)

目的；様々な日本語の表現を通して、日本語母語話者にとっての「自己」と対象の捉え方を探る。

－例1－。日本語表現の視点とは、何と、その視点は日本語独自のものなのか。

「自己」とは?

「自己」とは誰か? (個人)

「自己」とは何か? (概念)

「自己」とはどのように捉えられるか?

日本語と英語との比較

日本語と英語の「自己」の捉え方の違い

日本語と英語の「自己」の捉え方の違い

日本人の「ウチ」(「ソト」) (「自分」)

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

ウチ・ソト・オンゾ

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

英アジア諸語との比較

英語と日本語の「自己」の捉え方の違い

英語と日本語の「自己」の捉え方の違い

日本語と英語との比較

日本語と英語の「自己」の捉え方の違い

日本語と英語の「自己」の捉え方の違い

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「情報」の共有

「情報」の共有

「情報」の共有

「情報の共有」とは?

「情報の共有」とは?

「情報の共有」とは?

日本語と英語との比較

日本語と英語の「自己」の捉え方の違い

日本語と英語の「自己」の捉え方の違い

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方と「ウチ」(「ソト」) (「自分」)の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

「自己」の捉え方

結論1

結論1

結論1

結論2・3

結論2・3

結論2・3

参考文献

参考文献

参考文献

韓国人日本語学習者の日本語摩擦音における音声的な長さコントロールについて
 -文字の読み上げと遅延反復手法 (delayed repetition technique) による生成調査の比較-

国際言語文化研究科 日本語文化専攻 博士後期課程3年 曹秀弦(チョ スヒョン)

◆研究の背景

- ・韓国語の破裂音、摩擦音は平音、激音、濃音という3項対立、摩擦音は平音と濃音の2項対立である
 - いずれも有声性は弁別特徴ではない
 - ・韓国語は母音の長短の対立はあるが、若い世代ではこのような意味の弁別力は失われている。
 - ・韓国語の音体系→第二言語の習得に干渉する負の転移となる
 - 韓国学習者の日本語生成に影響を与え、有声子音と無声子音の区別が困難
 - 短母音と長母音の長さが日本語母語話者と違う
- ⇒以上のような困難さが日本語の長さの実現にも影響を与えているのか？

◆研究の課題

- 韓国人学習者が日本語を生成する際、
- ① 歯茎摩擦音と後部歯茎摩擦音の日本語の長さはどうに実現されるのか
 - ② 長母音を含む歯茎摩擦音と後部歯茎摩擦音の長さの実現は韓国語の2項対立の影響を受けるか
 - ③ 文字の読み上げ式の生成と遅延反復手法の生成の違いが長さのコントロールに影響を及ぼすか

◆実験方法

- ・被験者: 韓国人学習者40名(初級23, 中級17名)
- ・資料語: 1拍目、2拍目の子音が摩擦音、短母音と長母音/o/ (長母音が後続一語末は摩擦音が3拍目)

母音	摩擦音	摩擦音	摩擦音	摩擦音	摩擦音	摩擦音
短母音	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ
	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ
	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ
	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ
	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ
	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ
	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ
	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ
	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ
	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ
長母音	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ
	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ
	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ
	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ
	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ
	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ
	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ
	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ	ウムシ
	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ	エムシ
	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ	オムシ

- ・収録方法: ①文字の読み上げ→文字を見せ、読んでもらう。
- ②遅延反復手法→音声を開かせ、聞いた音声を生
- ③収録後、語の既知度調査

- ・遅延反復手法とは？単純リピートではなく、A→B→A→B(生成)
 - 例) A:あの方はだれですか？ B:うちの部長です。
 - (もう一度) A:あの方はだれですか？ B:うちの部長です(生成)
- ⇒文字の読み上げと遅延反復手法を行った理由
 - 文字情報から目→音韻ループ→心内挿書にアクセス
 - 遅延反復手法は文字がなく、音声のみ聞いた場合、長さのコントロールはできるかを調べるため

◆結果



◆考察とまとめ

韓国人学習者の日本語の長さの実現に影響を与える要因

要因	文字読み上げ		遅延反復		有意差
	長さ	母音	長さ	母音	
摩擦音の種類	有意差あり	有意差あり	有意差あり	有意差あり	有意差あり
後続母音の長さ	有意差あり	有意差あり	有意差あり	有意差あり	有意差あり
生成方法	有意差あり	有意差あり	有意差あり	有意差あり	有意差あり

⇒「どの要因が長さの実現に影響を及ぼすか」をまとめると...

1. 語の中の摩擦音が出現する位置、拍数、学習レベル、既知度は有意な差がなかった。→長さの実現に影響を与える要因だと言いにくい。
 - ⇒母語の影響(摩擦音は語中、有声化しない→位置関係なし)はある。
 - 長さの実現には学習が進んでも、語を知っていても影響を及ぼさない。
2. 長さコントロールに影響を与える要因として有意な差があった要因
 - 摩擦音の種類、後続母音の長さ、生成方法
 - 摩擦音の種類によって、長さの実現に影響を及ぼす要因が異なる。
 - ⇒母語の2項対立の影響よりも、それぞれの摩擦音の特徴、後続する母音の長さ、情報の種類(文字情報か聴覚的情報か)の影響の方が強い。

ワーキングメモリ容量と第二言語の習熟度との関係性

国際言語文化研究科 日本語文化専攻 日本語教育方法論講座 博士後期課程2年
二口 和紀子

研究背景

- ✦ ワーキングメモリ(WM)とは？
「情報の処理と保持を同時に担う記憶システム」
- ✦ WMが働く場面
例) 読解…先に読んだ文の内容を理解し覚えておきながら、新しい文を読み進めていく
会話…人から聞いた話の内容を理解し覚えておきながら、自分が話すことを準備する

- ✦ 第二言語の場合
「文理解のため、単語や文型を記憶の中から引き出す作業が必要」
- ✦ 言語適性としてのWM
「第二言語習得のスピードや効率性を予測する」

WM容量に高い負荷がかかる

第二言語の習得の効率性

研究目的

- ✦ 第二言語のワーキングメモリ容量は第二言語の習熟度に左右されるか否か
- ✦ 第一言語と第二言語のワーキングメモリ容量は第二言語の習熟度に関わるか否か

調査方法

調査対象: タイの大学で学ぶタイ人日本語学習者8名

調査手順: タイ語版・日本語
リーディングスパンテスト

- ✦ 第一言語(タイ語)と第二言語(日本語)のワーキングメモリ容量を測定する記憶課題
表示された文を音読しながら報告する単語を記憶し、音読した後にその単語を再生する
(2文~5文条件×5試行)

➤ 夏は暑い季節だ

夏は暑い...

➤ 日本はきれいな国だ

きれいな

日本は...

SPOT

- ✦ 日本語の習熟度を測定する課題
音声テープを聞きながら、解答题紙の同じ文にある空欄にひらがな一文字を書き込ませる

そこ(で)何をしてるんですか。

あの人は日本では有名(な)人ですよ。

分析結果

- ✦ 習熟度が高まるほど、タイ語版リーディングスパンテストと日本語版リーディングスパンテストとの間の相関も高まる

習熟度	低	中	高
相関係数	0.316 <i>n.s.</i>	0.562 **	0.688 **

** $p < 0.1$

- ✦ SPOTとはタイ語版、日本語版両者のリーディングスパンテストと弱い相関がある

	タイ語版	日本語版
SPOT	0.296 **	0.319 **

** $p < 0.1$

- ✦ 第一言語のワーキングメモリ容量が大きい人は、第二言語のワーキングメモリ容量も大きく、第二言語の習熟度も高い

第一言語のワーキングメモリ容量

第二言語のワーキングメモリ容量

第二言語の習熟度

結論

- ✦ 第二言語のワーキングメモリ容量は第二言語の習熟度に影響を受ける
— 第二言語のワーキングメモリ容量を測定するには高い習熟度が必要
- ✦ 第二言語の習熟度は第一言語、第二言語両者のワーキングメモリと関係がある
— 第二言語習得における言語適性の可能性

アン・ブロンテ 『ワイルドフェル・ホールの住人』における「サバイバル」 ——ヘレンの3つの自己、妻・母・クリスチヤン——

国際言語文化研究科 英語高度専門職業人コース 24期生 真由美

<研究の目的>

キーワード 「3つの自己」

主人公ヘレンが、絶望的な状況から自らを救い出す過程を、マーガレット・アトウッドの「サバイバル理論」を採用し、妻・母・クリスチヤンという、ヘレンの3つの自己の視点から分析する。

☆マーガレット・アトウッドの サバイバル理論とは☆

<サバイバルまでの、犠牲者の4つのポジション>

- 犠牲者ポジション① 自分が犠牲者であることを否認
- 犠牲者ポジション② 犠牲者であることを運命と考え諦める
- 犠牲者ポジション③ 犠牲者であることから脱することは可能と考え、行動を起こす
- 犠牲者ポジション④ 犠牲者ではなく、創造的な存在 (=サバイバー)。

★アン・ブロンテ (1820-1849) ★

- ・父は聖職者、母はアンが1歳の時に死去、教母によって育てられる
- ・シャーロット・ブロンテ (『ジェーン・エア』) エミリー・ブロンテ (『嵐が丘』) の妹
- ・19歳から6年間、ガヴァナスとして働く。
- ・26歳で姉妹とともに詩集を出版、ペンネームは「アクトン・ベル」
- ・『ワイルドフェル・ホールの住人』の出版直後、兄ブランウェルと姉エミリーが相次いで死去
- ・アン自身も、翌年に享年29歳で死去

★当時の批評家たちの酷評

「赤裸々な悪行を読者に見せ付ける俗悪な小説で、少女には読ませたくない」
「シャーロットのように情熱的でも、エミリーのように劇的でもないアンの小説は、明らかに2人の姉よりも見劣りがする」
「シャーロットの描いたヒロイン、ジェーン・エアは常に命の危機に脅かされていたサバイバーだが、ヘレンにも苦境があったものの、ジェーンほどではない」

果たしてそうだろうか？

★『ワイルドフェル・ホールの住人』とは

アン・ブロンテの二作目の長編小説であり、代表作。上流社会の人々の飲酒や放蕩の描写や、主人公ヘレンが不品行の夫のもとから失踪するというセンセーショナルな内容により、出版後大きな反響を呼んだ。姉シャーロットの低い評価も影響し、アンの作品は死後ほとんど注目されることはなかったが、1990年代になって再評価され始めた。

★アンのイメージ…

『ジェントル・アン』 シャーロットによって固定化？
姉シャーロットも、世間の酷評に同意するようなコメントを発表。「アンの強みは、簡潔で自然、かつ静かなペースであるにもかかわらず、『ワイルドフェル・ホールの住人』は、ブランウェルの悲劇が原因で沈んだ精神で書かれた作品であり、小説の主題は完全に関連性であった。」

このコメントが、アンの世の評価に起因

★小説が書かれた時代＝ 女性権利拡張の時代のさなか

- ・幼児保護法 (1839年) … 離婚後の母親の子にたいする権利拡大
- ↓
- 『ワイルドフェル・ホールの住人』
出版 (1847年)
- ↓
- ・離婚訴訟法 (1857年) … 夫の暴力など特別な事情を理由に女性が離婚する権利を認める

★『ワイルドフェル・ホールの住人』に込められた アンの宗教観＝万人救済説

アンは、カルヴァン派の予定説 (救済される人間は予め決まっている) に反発し、聖書を熟読、独力で、万人に対する神の愛を確信、後に、自分の信念が『万人救済説』として存在していることを知り、その主催者のトム牧師に手紙を送る。(万人救済説は一般的な聖書解釈からは逸脱しており、異端思想と考える人々が多かった。)

「私の最新作『ワイルドフェル・ホールの住人』の中で、私はこの信念を支持するような示唆を、作品に出来る限り多く盛り込みました。(ディヴィッド・トム師への手紙より)」

『人間喜劇』における「におい」

——パリの悪臭空間を中心に——

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 博士後期課程 柳橋美知子



1. 作者バルザックと『人間喜劇』

— オノレ・ド・バルザック (Honoré de Balzac : 1799-1850)

人間世界で繰り広げられているあらゆる現象を描ききろうとしたバルザックは、彼岸の世界を描いたダンテの『神曲』(仏: *La Divine Comédie*) にならい、自らの膨大な作品群の総題を『人間喜劇』(*Le Comédien humaine*) と名付けた。

『人間喜劇』を特徴づける手法として人物再登場法があるが、バルザックは登場人物だけでなく、空間(店・邸宅・通り・界限・公園・公共施設など)も数多くの作品に再登場させた。このような再登場の手法により、それぞれ別の物語として成立している各作品は、『人間喜劇』という名のもとに有機的な連結を見せている。

バルザックが描き出した登場人物は総勢2000人以上であり、多くの作品は当時のパリを舞台に物語が展開する。

2. パリに漂う悪臭

18世紀のフランスにおいて、人口の集中が著しいパリは悪臭芬々たる街であったようである。人々に入浴の習慣はなく、ゴミや排泄物などは毎夜窓から道路に投げ捨てていた。当時の人々にとってパリをとりまいていた悪臭は耐え難いものではなく、それを非難するのはもっぱらパリを訪れた外国人であった。

しかし、1750年頃から衛生学者・医者・化学者などが、パリのいたるところに悪臭を「発見」し始める。

⇒ 気体学の発達が一要因。



3. 気体学

気体学の主張: 死とは有機体の諸要素を固定していたセメント的な気体が肉体から漏れ出ることであり、腐敗はその歴然たる証明。したがって排泄物においては腐敗の始まりにほかならず、また腐臭や悪臭の中に身を浸すことは死を体内に導き入れることに等しい。

一 科学技術の進歩で腐敗や死の過程が解明され、腐敗臭や死臭がその過程で発生することが確認されると、こうした臭気は病氣や死を運ぶ瘴氣と同一視され、にわかに恐怖の対象となった。

一 公衆衛生学者たちは、悪臭の発生源となる街路・河川・墓地・糞尿処理場などの公共空間、および人間の密集する病院や刑務所を無臭化することに全力を傾けるようになる。また、個人の生活においても、上流階級では不潔な体で悪臭を放つ人間は疎まれるようになる。

⇒ 嗅覚の一大転換が起こり、悪臭は危険なものと見なされ断罪されるようになる。



4. 『人間喜劇』における意味作用

上記のようにして「発見」されたパリの悪臭空間を、バルザックは『人間喜劇』の作品中に度々登場させている。それら各作品において、その空間が物語に何らかの意味作用を及ぼしているか、また、再登場法による作品同士の有機的連結をふまえるなら、それら各作品の間に、その空間による何らかのつながりが見受けられるか、を分析する。

これにあわせて、当時の知を積極的に創作活動に取り入れていたバルザックにおいて、気体学はどのように作品内に立ちあらわれているのかも検討する。

リービ英雄における中国像の変遷

国際言語文化研究科博士後期課程
国際多元文化専攻多元文化論講座 張雅婷

◎ 問題設定

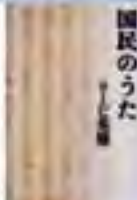
『リービ英雄』と『張雅婷』は、リービの中国像の変遷をめぐっての重要な研究資料である。この研究は、リービの中国像の変遷をめぐっての重要な研究資料である。この研究は、リービの中国像の変遷をめぐっての重要な研究資料である。

1. 原点としての台湾体験

リービは『我的日本語』（筑摩選書、2010）で、1993年に初めて中国を訪ねた体験について「初めて北京の地に立ち、大陸の言葉が聞こえてきたとき、その音によって、三十年ぶりに台湾での記憶が呼び覚まされた」と振り返った。

- 1) 小説『天安門』では、主人公は天安門を歩き回り、冷戦下の台湾で覚えた「狂人」「バケモノ」の毛沢東や共産党がいる暗闇大陸の中国像を想起した。
- 2) 『満州エクスプレス』では、1994年の満州取材を通して、作家安部公房との類似的な異郷体験を見出した。リービは台湾の家を「自分の家」と呼び続けているが、安部の満州体験は植民者と敗戦の記憶から成るものである。

中国は台湾記憶を喚起する装置である。リービが中国に行き続けるのは子供時代の原風景と北京語のためである。



左図『天安門』（講談社、1996）、中には「北京越境記」と「天安門」を収録。

右図『国民のうた』（講談社、1998）は表題作と「満州エクスプレス」を収録。

左図『ヘンリー・たけしレウツキーの夏の紀行』（講談社、2002）、中には表題作と「蚊と蝶のダンス」を収録。



右図『我的中国』（岩波書店、2004）



2. 中国描写の転換期/Personal China

小説『ヘンリー・たけしレウツキーの夏の紀行』や紀行集『我的中国』では、リービは経済発展が急速に進んでいる都市を離れて、内陸部の自然風景や庶民生活に注目している。

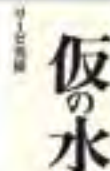
- 『夏の紀行』は皇帝から李・趙の姓を授けられた開拓者40人の歴史に見出した超越性を描くものである。
 - 『我的中国』には主に3つの主題が見られる。1つ目は白米恩 (Henry Norman Bethune 1890-1939)、ストロング女史 (Anna Louise Strong) のほか、後にもエドガー・スノー (Edgar Snow) や Jan Myrdal という「辛い中国」に友好的な態度を持つ外国人たちに言及する。2つ目は、直接北京語を使っての当地の人民との交流である。3つ目は初めて延安を訪ねた衝撃である。
- この時期において、台湾のことをあまり言及せず、その代わりに中国の描写が増幅していく。

3. 新たな中国像の構築へ

アメリカの9・11事件を題材にした小説『千々にくだけで』（講談社、2005）を経て、それ以降の中国紀行は現代中国を様々な視点で描くものである。台湾記憶の描写がほぼ消えて、いずれも一人の超越者として中国と日本に跨る言葉や歴史をめぐる思索を展開する。

- 1) 短編小説集『仮の水』は資本主義に翻弄される中国では、真と偽（本物と偽物）の区別が極めて曖昧化している。
- 2) 紀行集『延安』は毛沢東の延安時代に目を向けたが、彼はこうした国民党と日本軍の襲撃を免れることができた厳しい風土と歴史を生きた人民たちに対して、より大きな関心を示した。
- 3) 最新作『大陸へ』（2012）は半分アメリカのものだが、半分中国のものである。リービは中国に関する描写は政治的色彩が薄れた一方、急速的な経済発展の波に呑み込まれる前に、人民の姿を極力に捉えようとする。

この時期に描かれた中国像は、経済発展による貧富格差で揺れ動く現代中国を背景に、異言語体験や人民との交流が中心となっている。そして、僻地の風景や「紅色旅遊」のほか、そこに会った人民/農民との対話も作品の中に織り込まれている。



左図『仮の水』（講談社、2008）、中間の『延安—革命聖地への旅』（岩波書店、2008）、右図『大陸へ—アメリカと中国の現在を日本語で書く』（岩波書店、2012）

◎ まとめ

リービの中国像は、自ら編み出した超越の人生と軌道の裏面で情動が交錯しているものである。台湾体験に過ぎない想像の中国から脱却して、自ら現代中国を愛するなかで、自身の独自の中国像を作り出すのである。彼は『彼岸』の如く持った新しい言葉としての北京語、及び書き言葉としての日本語による対話を通して「日本語で中国を書く」ということを目指している。

◎ 参考文献

リービ英雄の中国物は、『天安門』（1996）、『国民のうた』（1998）、『ヘンリー・たけしレウツキーの夏の紀行』（2002）、『我的中国』（2004）、『仮の水』（2008）、『延安』（2008）、『大陸へ』（2012）がある。その他、自伝的日本語論『我的日本語』（2010）を参照。

『ソルブのクラバート伝説』にみる共同体と他者性

国際言語文化研究科 博士後期過程 伊藤 佳

1. 『ソルブのクラバート伝説』とは

- ・ドイツ東部の少数民族ソルブ人が伝承
- ・『クラバート』：善良な魔法使い、死後には魂の救済
- ・発生から現代まで繰り返し再話、モチーフの発展と変遷
- ・物語の構造：『複合物語』
 - － 核：実在した人物にまつわる民衆の反応
 - － 様々な魔法伝説・メルヒェンモチーフ
- ・物語構造の変遷
 - 口承～19c初頭：『異常』な人物を魔法使いとして報告する
 - 19c半ば～：Sage からKunstmärchenへ・カトリック的な魂の救済モチーフが主題となる
 - 20c初頭：民族解放者・ソルブ民族アイデンティティの表象
 - 《伝承の記録から文学作品へ》



2. ソルブ民族とドイツ民族

- ・中世以前から民族的・言語的・宗教的に複雑な確執の関係
- ・ドイツ民族：東方植民政策・キリスト教化によるソルブ民族支配
- ・ソルブ民族：独自の言語文化、宗教の禁止・社会的迫害
- ・ソルブ民族の主権回復は第二次世界大戦後
- ・19c半ば：ソルブ民族文学運動…カトリック系知識人が主導
- ・『クラバート伝説』の再話と新解釈はソルブ民族文学運動の主導者によって行われた
- ・ドイツ民族とソルブ民族、プロテスタントとカトリックが混在する複雑に絡み合った確執を抱えた地域



3. 『クラバート』の核とキリスト教

- ・『伝説の核』：クロアチア人領主・カトリック地域に埋葬
- ・カトリック教会：少数派
- ・『クラバート』の原形は、何らかの非凡な功績をあげ、ドイツ人・プロテスタント=多数派、ソルブ人・カトリック=少数派の式の中に入ってきた外国人
- ・ソルブ民族のアイデンティティの表象となった人物はそもそもソルブ民族ではなかった
- ⇒なぜ、善良な魔法使いとして伝承され、親しまれた？



4. 共同体に侵入する他者－彼岸世界と魔法使い

- ・メルヒェン・伝説：共同体内部＝此岸世界(人間の世界)
共同体外部＝彼岸世界(人間世界でない)
- ・魔女や魔法使い：世界の境界を越えて此岸と彼岸を行き来する存在
- ・外国人：共同体外部(彼岸世界)から共同体内部(人間世界)に侵入する脅威
- ・『クラバート伝説』の核は共同体内部に侵入した外国人⇒なぜ善良？
⇒『クラバート』を伝承したソルブ民族自体、『共同体の他者』としてみなされてきた。

主要参考文献

- ・Nedo, Paul, *Zur Entstehung einer sorbischen Volkserzählung*. - In: *Deutsches Jahrbuch für Volkskunde*, Bd. 2., Berlin 1936, S. 33-50.
- ・Ehrhardt, Marie-Luise, *Die Krabat-Sage. Quellenkundliche Untersuchung zu Überlieferung und Wirkung eines literarischen Stoffes aus der Lausitz*, Marburg 1982.

○『魔法使いクラバート』が、共同体の中に侵入し、ソルブ民族と共生した『善良な他者』として語られたのは、『他者』に対するソルブ民族の視線に、一種のシンパシーが存在していたからだと考えられる。

表層に浮かび上がらなかったカーソン・マッカラーズの意図を探る —作品を音楽の表象から見る—

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 博士後期課程 D2 岩塚さおり

カーソン・マッカラーズ(1917~1967)

Georgia州出身の作家。15歳の時、リューマチ熱にかかったのに始まり、その後心臓病、乳がん、脳出血など病魔と絶えず戦った。最初はコンサートピアニストを目指していたが、文学に転じ、Columbia大学、そしてNew York大学の創作コースに籍を置いて創作に励んだ。1936年、雑誌Storyに最初の短編、'Wunderkind'を発表。主な作品として、1940年*The Heart Is a Lonely Hunter* (映画化)、1941年*Reflections in a Golden Eye* (映画化)、1946年*Member of the Wedding* (劇化、上演、のち映画化)、1951年*The Ballad of the Sad Café* (劇化、上演)が挙げられる。短編も多数執筆した。



カーソン・マッカラーズ 1959年
カール・ヴェン・ヴァクテン撮影

カーソン・マッカラーズの私生活

・アメリカ国内外の政治、社会情勢に常に高い関心を示した。1936年、最初の短編 "Wunderkind" 「神童」を出版する時、出版社から自伝的スケッチも載せることを依頼され、「共産主義であることを宣言することで自分のことは明らかにしている」と答えた。

・マッカラーズは、1937年、リーヴズ・マッカラーズと結婚するが、1941年に離婚。1945年リーヴズと復縁するが、再び破綻し、1953年リーヴズはカーソンとの心中を企て失敗し、その後自殺。結婚の破綻は両方ともホモセクシュアルであったことが原因と考えられている。

・アルコール中毒で、常にシェリー酒の入った水筒を持ち歩いていた。また、ヘビースモーカーであった。

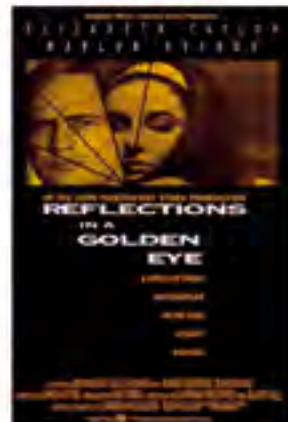
・リーヴズと別れた後、ニューヨークのブルックリンハイツ、ミダーク通りにGeorge Davis (Harper's Bazaarの編集長)、W. H. Auden (作家)、Gypsy Rose Lee (女優、脚本家)、Benjamin Britten (作曲家)と共に住んだ。住人が2月生まれが多かったため、February Houseと呼ばれた。フェブラリー・ハウスは、芸術家の拠点となり、シュルレアリストの画家、サルバドール・ダリと妻でモデルのガラ、リチャード・ライト(作家)も頻りに訪れた。劇作家、テネシー・ウィリアムズとは親友であった。



カーソン・マッカラーズ 1943年

博論研究の目的

カーソン・マッカラーズは、作家になる前はコンサート・ピアニストを目指していた。従って、クラシック音楽、特にピアノ曲とその作曲家について熟知しており、作品の多くに音楽、音楽家を挿入し、謎めいた描写と展開を試みている。マッカラーズが、音楽、音楽家を用いて語りの中で重要な展開を繰り返していくという視点から、それぞれの作品を眺めることで、「愛と孤独」「報われない愛」が主題と言われてきた作品の異なる解釈が可能であることを明らかにしていく。



『黄金の眼に映るもの』1967年
ジョン・ヒューストン監督

本発表の概要

Reflections in a Golden Eye、日本語の題名『黄金の眼に映るもの』(1941)にはフィリピン人男性でAnacleto(アナクレト)と呼ばれる、陸軍駐屯地の白人将校の家庭で料理をし、ラングドン少佐の病弱な妻アリソンの身の回りの世話をするメイドが登場する。当時フィリピンは、アメリカの植民地であり、マッカラーズは、表層的には、フィリピン出身のアナクレトを、1930、40年代南部のアメリカ人家庭に仕えていた黒人メイドと同等の位置づけで描いている。

しかし、アナクレトは、フランス語を習い、絵を嗜み、アリソンとともにバレエとクラシック音楽に親しむという、植民地支配下で生きるべき民族とはかけ離れた描写で描かれている。植民地支配下で生きるべきアナクレトが、亡命ロシア人の作曲家であり、ピアニストであるラフマニノフ及び作品について三度の風刺的言及をするのはなぜなのか。

本発表では、植民地支配下にあるフィリピン人アナクレトにラフマニノフを批判させることで、亡命者ラフマニノフは、祖国ロシアにいた時とは曲風が変わり、アメリカに服従したような作曲へと変わっていったことを指摘する。すなわち、マッカラーズはラフマニノフが精神的側面において、アメリカの植民地支配に服従したことを指摘したのだと言える。

参考文献

- Carr, Virginia Spencer. *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers*. London: Peter Owen, 1977. Print.
McCullers, Carson. *Reflections in a Golden Eye*. New York: Penguin Books, 1967. Print.
Osterhammel, Jürgen. *Colonialism: A Theoretical Overview*. Trans. Shelly Frisch. Princeton: Markus Weiner, 2005. Print.
Rimm, Robert. *The Composer-Pianists: Hamelin and the Eight*. Portland: Amadeus, 2002. Print.



ピアニスト、作曲家
セルゲイ・ラフマニノフ 1921年



高行健の隠逸思想について ——長編小説『靈山』を中心に——

名古屋大学 国際言語文化研究科 国際多元文化専攻
東アジア言語文化論講座 博士前期課程2年 侯 玉夢

背景: 高行健は「普遍的な正当性、痛烈な洞察力、言語的な独創性をもった作品によって、中国の小説や劇作に新たな道を開いたこと」という受賞理由により、2000年度ノーベル文学賞を受賞した初めての華人作家となる。現在まで、高行健に関して、人称表象、言葉の流れ、不条理劇についての研究は数多く行われてきた。また、高行健の作品における西洋文学と芸術との関わりはかなり注目されている。一方で、中国伝統文化との関連に注目されることは少なく、更に、彼の作品が隠逸思想に影響されたことについて言及した研究も多くは行われていない。



目的: 『靈山』において、高行健が仏教、道教思想をどのように受け取ったのかを考察する。さらに、老荘思想と関連の深い「大隠」と褒め称えられている市隠思想を視点とし、高行健の理想とする隠逸のあり方と高行健自らの隠逸志向を比較し考察する。

方法: 第一に、『靈山』に表れている隠逸思想の要素を考察する。『靈山』のいくつかの章段に描かれた隠逸者の姿を取り上げ、隠逸思想が高行健に与えた影響を検討する。隠逸は宗教との関わりについて、『靈山』に描かれる仏教と道教の隠者像それぞれがどのような影響下にあり、また、高行健がどのような思想を込めて人物造形を試みたのかについて考察する。次に、『靈山』における隠逸者の逸話の引用の方法、表現手法についても検討したい。また、『靈山』の中に現れる高行健の隠逸志向特に生死観に対する分析を通して、高行健の隠逸観を探る。

主な参考文献:

何鳴『遁世与逍遥』敦煌文艺出版社、2006年

劉劍梅「現代庄子的凱旋——論高行健的大逍遥精神」華文文学(110)44—51頁、2012年

劉再復「論高行健狀態」『高行健論』聯經出版社、2004年

王仁祥『先秦兩漢的隱逸』国立台湾大学出版委員会、1995年

高行健著 飯塚容訳『靈山』集英社、2010年

高行健著 飯塚容訳「文学と玄学」『すばる』、集英社 25[12] 234-247頁、2003年

神楽岡昌俊『中国における隠逸思想の研究』ペリカン社、1993年

小林昇『中国・日本における歴史観と隠逸思想』早稲田大学出版部、1983年





Fanny Mendelssohn Hensel と サロン活動

国際言語文化研究科 国際多元文化専攻 ヨーロッパ言語文化講座
博士後期課程 米澤幸子

17世紀にパリで成立したサロン文化がドイツに渡り、18世紀のベルリンで文学をはじめとして様々なジャンルのサロン活動が盛んになる。この女性を中心とする活動は、当時の女性に閉鎖的な社会において、女性が公的な社会とつながる可能性の一つであった。

1805年、銀行家アブラハム・メンデルスゾーン・バルトルディの長女として生まれ、卓越したピアニストとしての能力を持ち、500曲余りの作品を作曲しながら公の場での音楽活動と作品の出版を禁じられていたファニー・ヘンゼル(旧姓 メンデルスゾーン・バルトルディ)が自宅での音楽サロン「日曜音楽会」の企画、運営、出演を通じて音楽活動を私的空間の枠を超えて広め、この活動で得られた自らの作品の評価、人脈が、四十代にしてようやく下した出版の決意にどのように結びついたかを考察する。

メンデルスゾーン家の日曜音楽会

メンデルスゾーン家の「日曜音楽会」は銀行家アブラハム・メンデルスゾーン・バルトルディが1821年、並外れた音楽的才能を持つ息子フェリックスと娘ファニーの作品の発表と聴衆の前での演奏の場として、プロの演奏家を雇って自宅で始めたものであった。それは隔週の日曜日の昼間、個人的に招待された客を聴衆として開催された。引っ越しやフェリックスの教養旅行などのために中断されながら続けられたが、1829年には完全に止められた。

ファニー・ヘンゼルによる再開

1831年、ライプチヒ通り三番地のメンデルスゾーン・バルトルディ家の庭の音楽ホールでファニー・ヘンゼルの企画運営によって再開された「日曜音楽会」は当初のものとは全く異なったものであった。王立劇場と1791年に創立された合唱団体ジングアカデミーを持ち、多くの音楽を愛好する教養市民が集まっていたベルリンは、当時のヨーロッパの音楽の中心地であった。音楽愛好家や貴族を聴衆とし、ベルリンを訪れるプロの音楽家をゲストとして招き常にレベルの高いコンサートを提供したこの音楽会は、最盛期には300を超す聴衆が訪れ、夏休みや家族の行事による休止をはさみながら隔週日曜日の昼間、ファニーの亡くなる1847年4月まで続けられる。



歌手、器楽奏者ともに演奏レベルの高いアマチュアを集め、彼らとプロの音楽家との共演で演奏会を行ない、プログラムはバッハから同時代の作曲家の作品まで幅広く、弟フェリックスの作品のベルリン初演が行われることもあった。ファニーはほとんどの演奏会でピアノパートを受け持ち、彼女自身の作品も主にこの演奏会で発表された。ほとんど無償で出演を引き受けたメンバーたちをこの音楽会に引き付けたのは、彼女の音楽的才能と共に身分、宗教に関係なく交友の輪を持った彼女の祖父モーゼス・メンデルスゾーンから代々受け継がれてきたサロンエトとしての彼女の才能にもよると考える。

作品の出版

ファニーは長年にわたり作品の出版を切望しながらも、弟フェリックスの強力な反対により諦めてきた。それは狭い活動範囲の中で彼女の作品の価値を正確に判断できるのは弟だけだったからである。しかし1846年40歳にして弟の許可を得ずに作品の出版を決意する。その際には彼女の作品の価値を認め、その作品を外の世界へ紹介した日曜音楽会の仲間の存在がある。

フランツ・ホイザー(Franz Hauser 1794-1870): ウィーン出身の当時有名なバス歌手。バッハの作品の収集家。日曜音楽会に度々ゲスト出演。早くからファニーの歌曲に関心を持つ。彼女の歌曲をウィーンで自ら演奏した可能性もある。

パウリーネ・デッカー(Pauline Decker 1811-1882): 王立歌劇場のソプラノ歌手。日曜音楽会の常連の歌手であり、ファニーの伴奏で多くの彼女の多くの作品を演奏する。

ロベルト・フォン・コイデル(Robert von Keudell 1824-1903): 後に政治家となるが当時はまだ試補であった。非常に音楽的才能に恵まれたアマチュアピアニスト。ファニーの作品を評価し出版に助力する。

出版社

日曜音楽会でのファニーの作品の評判から彼女に作品出版のオファーを出す。生前彼女が自分で選曲して出版された6曲。

音楽出版社 ボーテ・ウント・ボック (Bote und Bock): オーナーの一人であるグスタフ・ボックはユダヤ人であり、ベルリンの作曲家の作品出版に力を入れていた。

1846年 op.1『ピアノ伴奏による6つの独唱曲』 Vol.1

op.2『ピアノのための4つの歌曲』 Vol.1

1847年 op.3『夏の歌 ソプラノ、アルト、テナー、バスのための歌曲集』 Vol.1

op.6『ピアノのための4つの歌曲』 Vol.2

音楽出版社 シュレジンガー (Schlesinger): すでに1837年にフェリックスの意志に反してファニーの歌曲『舟遊びをする女』を数人の作曲家の作品を集めたアルバムの中に入れて出版する。

1847年 op.4『ピアノのための6つのメロディ No.1-3』 Vol.1

op.5『ピアノのための6つのメロディ No.4-6』 Vol.2



The Role of Social Media as a Tool of Communication for Marginalized Groups: The Case of *Viva Favela*

Gender Department – D1 Eulalia Vasconcelos



Research Objective

To understand social media usage of marginalized groups favelas' residents in Brazil (slums – low income people) as a tool of communication and how these people can take part of the public debate through social media.

Marginalized Groups

Cannot take part of the discussion and are **not invited to public debate**.



"The role of *Viva Favela* is give voice to the excluded, give a gun called communication." (Joao Gilberto, 18, volunteer)

Viva Favela

Created in 2001 was a wish from favelas' residents for **social integration and digital inclusion**.
2,859 people registered and **379 collaborators volunteers**.
2.3 new entries (including news reports, videos, images and audios) are posted everyday.

"A powerful conversation tool" (Saulo Valley, volunteer)

"*Viva Favela* is the voice of the community" (Daniela Vieira, 25, volunteer)

The internet provides the active participation of the citizens



The use of the internet tools by marginalized groups

Methods

- Content analysis
- Interviews

January to June, 2012, only news, in total: 202 entries (news stories) written by 52 collaborators volunteers.

24 interviews were conducted by e-mail, Skype, and Facebook. (collaborators volunteers and website team)

- 77.0% of the collaborators volunteers live in favelas (slums)
- 40.3% of them are women
- 48% of the contents are written by women

"The story of the website is crucial to progressive 'breakdown of favelas' stereotypes" (Thamyra Thamara, 23, volunteer)

"We fulfill our mission of promoting citizenship and social integration" (Rosalina Brito, 52, volunteer)

Findings

- *Viva Favela* as a **tool of communication**: talk about events, everyday life, services, complaints, space to circulate the information.
- *Viva Favela* as a **community media**: Collaborators volunteers talk about events in their own communities
- *Viva Favela* as **space to criticize/ question** traditional media: stereotypes/ naturalized discourse.
- *Viva Favela* as **social network**: people create a kind of relation/connection with the website and collaborators volunteers.

2012年度提出修士論文題目一覧表

氏名	題目
岩崎 由実	Narrative Devices in <i>The Mayor of Casterbridge</i>
富田 あゆみ	越境するファッション—ゴシック・ロリータをめぐる表象文化論的考察
神谷 淳	Nagoya-India Net～在日インド人コミュニティ・ホームページ～
張 婧迪	中国における環境広告戦略の考察
増本 明香	フランスにおける高等教育と「機会の平等」—パリ政治学院特別選抜制度の事例を通して—
王 若洋	現代中国語における“了”の用法について—中国語学習者を対象とする誤用分析の観点から—
飯田 理恵子	フランス語の話し言葉における従属接続詞parce queの機能的拡張 —日本語の「カラ」との比較を通して—
於 澤琳	日本語と中国語における移動表現の対照研究 —移動動詞と使役移動動詞の語彙化パターンの異同をめぐって
小川 麻依子	日本における総角結びの独自性
何 美霖	第二言語としての日本語における発話調整メタ言語の使用について —中国人日本語学習者と韓国人日本語学習者の比較—
梶原 彩子	「えらい」と「立派」の意味分析
川口 治花	無標の因果複文の日中対照研究 —テ形を用いる日本語の複文と“关联词”（「接続表現」）を用いない中国語の複文を中心に—
久野 百代	香港広東語を母語とする日本語学習者の促音の脱落・挿入・混同について —中国語北方方言母語話者との比較を通して—
邢 曉婧	3言語間の語彙的表象の結合関係 —中国人、韓国人、日本人の外来語処理—
周 惟佳	中日における魯迅作品の教材利用に関する一考察
周 景紅	中国語を母語とする日本語学習者のピッチアクセントの知覚に及ぼす諸要因

氏名	題目
孫 宇	中国語を母語とする日本語学習者の自動詞と可能表現の選択について
筒井 紀衣	留学生のエントリーシートに対するメタ認知的知識の構造の分析 —就職活動の経験者と未経験者を比較して—
白 美蘭	韓国語・中国語母語話者による複合動詞「～出す」の習得 —母語の影響を中心に—
朴 海蘭	中国人日本語学習者の値段交渉ストラテジー
游 安琪	中国語母語話者における日本語モダリティ表現の使用について —「はずだ」「わけだ」「にちがいない」を中心に—
劉 煜	現代日本語トートロジー表現の研究
梁 辰	中国語（北方方言）を母語とする日本語学習者の日本語アクセント型の弁別に関する聴取研究 —4拍語を資料語としたABX課題を用いて—
伊藤 惟	Die Krabatsage : Repräsentation eines guten Zauberers als volksidentitätsstiftende und die Fremdheit verkörpernde Gestalt
鬼頭 孝佳	近世の女訓に関する考察
許 慧	紙媒体エスニック・メディアのゆくえを探る —在日中国人向けの紙媒体エスニック・メディアの事例分析を通して—
戸谷 向平	わが国の母親向け育児雑誌における「父親」—1970～2000年代の変遷—
西田 有香子	「発達障害」を扱うNHKテレビ番組の言説特性 —「逸脱の医療化」を中心に—
青山 太郎	映像制作における触覚的・感覚的知性の涵養としての創造性について
石川 紀実	アラブ地域に見るパブリック・ディプロマシーの研究 —アルジャジーラとアメリカ・イギリス—
王 倩	中国におけるメディア・リテラシー教育の内容に関する研究 —教科書の内容分析に基づいて—
郭 琦琪	現代中国バレエに見られる中国的要素 —バレエ『大紅灯籠高高掛』の作品構造とその受容—
梶浦 眞由美	The Effect of Rapid Listening with Transcript Reading Tasks on Improving Listening Proficiency of Japanese EFL Learners

氏名	題目
川 合 結 子	民主政治の誕生とメディア報道の相互作用 —1997年メキシコ連邦議会選挙の分析—
久 野 舞 香	文化的要素を含んだピクトグラムの有用性についての考察—留学生の思考過程に着目して—
江 康 慧	電子新聞の現状と可能性 —全国紙・地域紙のデジタル戦略に関する考察—
田 中 雄 大	Contacto lingüístico en Argentina y sus regiones vecinas -Estudio de caso entre español y portugués-
趙 宏 剛	中国語における“NP1 + A + V + NP2”形式の成立条件とその構文の特徴について
陳 映 慈	放送における「多様性」の追求 —台湾・アメリカにおけるメディア所有規制の考察—
陳 悦	李安の『ラスト・コーション』における視線のポリティクス
寺 島 工 人	対日観形成に果たす日本製番組視聴経験の影響に関する考察 —フランスを事例として—
中 野 翠	相互行為としての性労働 —性労働従事女性たちの「抵抗」と「共在」の態度に関して—
白 冬 暁	アメリカの中国系二世と日系二世によるアイデンティティ探求 —『五番目の中国娘』と『二世娘』の比較を通して—
林 愛 実	The Acquisition of Inflectional Morphemes by Japanese Learners of English in EFL Settings
坂 望 美	The Effects of Educational Intervention on the Motivational Development of Japanese EFL Students
胡 斯 楞	張承志論 —『黒駿馬』と内モンゴルとの関わりについて—
横 山 雅 子	Examining the Effect of Task-Based Language Teaching on Implicit English Ability for High School Students in Japan
李 思 進	テレビドラマにおける男女言葉の使用に関する考察
李 瑞	“美しい姿”を求める少女たち —現代少女ファッション誌における少女のイメージについて—
李 程 思	1930-40年代中国の新型旗袍に対する女子学生の受容 —女子教育、ライフスタイルを中心に—
路 浩 宇	中国語の受身文に関する研究 —他動詞と自動詞という観点から

2012年度提出博士論文題目一覧表

氏名	題目
服部 明子	ビジネス場面におけるクレーム電話会話集結部の分析
清水 由貴子	コーパスを利用した現代日本語における反復構文の記述的研究
李 宛 儒	日本統治下における台湾近代劇の生成と発展—植民地知識人の演劇活動の系譜を中心に—
呉 恩 英	在日朝鮮人文学における「朝鮮的なもの」 —金石範の作品を中心に—
坂本 麻裕子	修身教育の形成と近代的エトス —寓話・童話・昔話における〈子ども〉の役割—
堀 江里香	官約移民「後藤潤」像の変遷 —ハワイ日系社会黎明期の記憶をめぐって—
尾山 晋	20世紀後半のイギリスのニッチ・メディアとマイクロ・メディアにおける若者像—ロックンロール・ファン、モッズ、スキンヘッドに関する諸言説の研究
渡邊 拓哉	再魔術化の文化研究 —20世紀後半期における自己変容の技術と欲望—
KANDUBODA ARACHCHIGE Prabath Buddhika	正順語順を決める情報：書き言葉と話し言葉におけるシンハラ語文の認知処理
梶川 克哉	複文表現の意味的カテゴリー —「目的」「付帯状況」をめぐって—
本田 安都子	Givers in Exile: Americanization, Gender, and Reciprocity in the Works of Anzia Yezierska (異郷の地に住む贈与者—アンジア・イーリアスカの作品におけるアメリカ化、ジェンダー、互酬性—)
張 蓮	ジェンダーの視点から読む志賀直哉の短篇小説 —男女関係における女性像を中心に—
劉 海燕	台湾新文学運動の初期的展開 —1920年代植民地知識人青年の近代探索—
木村 めぐみ	イギリス映画産業の「第三の道」 —ブレア政権時のクリエイティブ産業政策をめぐる歴史的考察—

氏名	題目
飯田 香織	音象徴語をめぐる普遍性と個別性
早川 杏子	中国語を母語とする日本語学習者による漢字語の認知処理メカニズム
高 媛	セクシュアリティから見る丁玲文学における周縁性 —知識人・レズビアン・性的被害者の女性たちをめぐる—
張 小青	性を演じる —映画における異性装とジェンダー—
田 云明	『方丈記』における「閑居」の世界 —〈仏〉〈隠〉融合の視点から—
方 光鋭	中国清末民初期の修身教科書と日本
村田 香恵	日本留学試験「記述問題」のトピックに関する研究
許 永蘭	現代日本語における「切断・分離」を表す動詞の意味分析

『方丈記』における「閑居」の世界 — 〈仏〉〈隠〉融合の視点から—

田 云明 (国際言語文化研究科学術研究員、日本語文化専攻比較日本文化学講座 博士後期課程 2013 年博士号取得)

1. 本論文の目的

本論文は遁世者鴨長明の『方丈記』における「閑居」の再解釈を試みるものである。具体的には、文人、文学活動と隠逸思想の導入の関連性に着眼し、外来文化をいち早く日本に紹介した文人、とくに文人出家者の文学活動に焦点を当て、上代から『方丈記』に至るまでの、表現の型として作られた理想的出家スタイルと信仰生活の特徴を分析するうえで、〈仏〉〈隠〉融合の一つの到達点となる『方丈記』「閑居」の表現世界を解明する。

2. 問題意識

本論文の問題意識は、『方丈記』前半で仏教的無常観に基づいて描かれた「世中」「都」と、後半で老荘・隠逸思想に基づいて描かれた「閑居」とが特異的な対照関係にあり、このような構成はいかなるプロセスを経て形成されたのか、というところにある。それを解明することは、古代、中世の日本における外来文化の受容のあり方の解明にも繋がる重要な問題である。先行研究の議論からもうかがえるように、『方丈記』は様々な要素が混ざり合っている作品であり、単なる無常観の考察、或いは単なる老荘・隠逸思想の考察だけでは、十全に理解することができないと思われる。従来の研究は、ややもすると『方丈記』の「閑居」を老荘的なものと評価する傾向があるが、そのような固定観念は、『方丈記』「閑居」の本質を見誤らせる恐れがある。『方丈記』における「閑居」を解明するには、より複眼的な視座が必要となる。

3. 視点と方法

本論文では、『方丈記』の「閑居」を〈仏〉〈隠〉融合の一つの到達点と見なし、そこから遡ってその表現形成のプロセスを探った。そのために当時外来思想をいち早く摂取した文人、とくに文人出家者の文学活動に焦点を絞って考察した。具体的には、主に三つの視点を設けて『方丈記』「閑居」の解明を試みた。

- ① 僧侶と文人の文学交流
- ② 白居易詩文の受容過程
- ③ 理想的遁世者像の創出過程

ただ、この三つの視点ははっきりと分けることができないため、本論文はこの三つの視点を念頭に置きながら、上代から鴨長明の『方丈記』に至るまでの注目すべき点を取り上げながら〈仏〉〈隠〉融合の過程を考察した。

4. 各章の要旨

第一章では、主に仏教思想と隠逸思想を含む外来文化の導入

者となる留学僧に注目し、留学僧に纏わる伝記、彼らの詩作及び宮廷官僚との詩文交流についての考察を通じて、隠逸表現の受容と再構築において僧侶が果たした役割を明らかにした。第二章では、主に撰閑期に生きる菅原道真、橘在列、慶滋保胤といった紀伝道出身の文人官僚の文学活動をめぐって、文人官僚の官途の不遇から出家への転向、及び撰閑期における文人出家の特徴と意味について、当時の白居易の閑適詩に表われた中隠的側面と仏教的側面の受容を軸にして考察した。第二章の考察を通じて、〈仏〉〈隠〉融合のさらなる展開につき、文人間における浄土教信仰の広まりという時代背景、及び白詩に内包される中隠的側面と仏教的側面の影響を確認することができた。第三章では、寺院・既成教団の体制外で活動する宗教者に注目し、彼らの文学的造形及び彼らが理想とした信仰生活に関する記録や文学作品を取り上げて、そのなかに援用された隠逸表現の日本化、さらに日本独自の「遁世」の成立過程を探った。これらの考察により、〈仏〉〈隠〉がそれぞれ変容しながら融合しあって、「遁世」という新たな出家スタイルが成立する過程を明らかにした。第四章では、遁世者鴨長明が編纂した『発心集』を取り上げて、そこに投影された長明自身の遁世観、数奇観に焦点を当てて考察した。第四章の考察を通じて、長明が理想とした遁世者像に内包される独居、和歌・管絃への没頭という二点の特徴が明らかになった。さらに、白居易の「狂言綺語観」が日本化する過程において、長明が創出した数奇本質論は重要な画期をなしていることが判明した。第五章では、『発心集』の考察で明らかにした理想的遁世者像の特徴を手がかりに、長明の理想的遁世生活の文学表現となる『方丈記』の「閑居」をめぐって、平安末期から鎌倉初期にかけての白詩の受容を視野に入れつつ考察した。とくに、仏教的無常観に基づく前半と、老荘・隠逸思想に基づく後半という、『方丈記』の構成に見られる非整合性に着目し、『方丈記』の「閑居」と浄土の関わりを指摘した。

5. 本論文の結論

要するに、主に文学作品によって導入された隠逸思想の摂取とその日本化において、留学僧をはじめ、文人官僚、さらに文人出家者が大きな役割を果たした。こうした文人、とくに文人出家者の文学活動における〈仏〉〈隠〉の融合過程を経たがゆえに、やがて『方丈記』「閑居」の世界という文学表現の「形」が成立したのである。

中国清末民初期の修身教科書と日本

方 光 鋭 (国際言語文化研究科 日本語文化専攻比較日本文学講座 博士後期課程 2013年博士号取得)

1. 本論文の目的

本論文は、中国の近代教科書の成立過程において最も重要な役割を果たした清末民初期の代表的な四種類の初等教育用修身教科書を取り上げ、これらに絶大な影響を与えた日本の修身教科書と対照して、日本モデルへの依存、模倣、排除、離脱のプロセスを具体的に考察したものである。

2. 研究方法

本論文は基本的にテキストを比較して分析する方法を取った。清末民初期の中国では、政治情勢が激動して教育制度の整備が遅れ、教科書の「国定制」が何度も議論されながら、ついにはそこまで辿り着けなかった。そのため、商務印書館、中華書局など民間の出版社が近代教科書の成立に深く関与し、場合によってその動向を大きく左右したことは事実である。「審定制」(検定制)が実施されていたため、教科書の編纂は基本的に体制側の方針に従っていたが、諸般の理由から全く一致していたわけではなかった。しかも、外発的開化の中国にとって、教育理念と実践能力のギャップは深刻な問題であった。そのため、本論文は体制側の制度、方針に注目すると同時に、出版社、編纂者の意図と政治的背景、教育理念にも十分配慮し、関連する日中の教科書の内容に踏み込んで徹底的にテキストを比較・分析した。

3. 本論文の要旨

本論文は四章から成っている。第一章は日本人による中国人向け修身教科書『東亜普通読本』(1905)、第二章は日中共同制作の『最新 修身教科書』(1905)、第三章と第四章は民国以後、中国人自身の手によって制作された『共和国教科書 新修身』(1912)と『新編 中華修身教科書』(1913)を中心に取り上げ、以下のように論述している。

1903(明治36)年、伊沢修二の創案により、中国人向け教科書の出版を主とする泰東同文局が創立された。第一章はその中国人向け教科書『東亜普通読本』(1905 / 明治38年)が宮内省の勅撰修身書『幼学綱要』(1882 / 明治15年)を基に編纂されたものであることを初めて明らかにした。また、この両書と日本の修身教科書とを比較して、伊沢修二は『東亜普通読本』において、植民地台湾で形成した同化教育と文化統合の方法論を用い、日清の「混和融合」を目指して、近代文明を導入するという時代の課題に優先させた。その結果、中国を近代化に成功した日本の文明水準に引き上げるのではなく、伝統的徳徳の維持を重視して、教科書から近代的要素を排除することになった。

第二章は中国商務印書館と日本金港堂の共同制作による『最新 修身教科書』が、日本の第一期国定修身教科書の編纂方法、徳目構成を「模倣」したことを確認し、商務印書館のキーパーソン張元済の編纂理念を手がかりとして、両書における類似した近代的徳目の内容を具体的に比較・検討した。その結果、『最新 修身教科書』は日本から学んだ近代的徳目に付会して、その内容を中国古典と差し替えたことを検証した。そもそも儒学思想とは異質な近代的モラルは、古い儒学の枠組みに押さえ込むことが困難であり、それが内容と徳目のズレ、牽強付会として露呈する結果となった。こうして近代的教科書と古典の距離が縮まると同時に、近代的市民モラルは重い中国的枷をはめられた形で導入され、近代思想の円滑な受容が防げられたことを指摘した。

第三章は民国元年の新教育方針に応じた商務印書館版『共和国教科書 新修身』(1912)と中華書局版『新編 中華修身教科書』(1913)を中心に考察した。日本との合弁によって痛烈な批判に曝された商務印書館も、「中国人は中国人の教科書を使うべきだ」と主張した中華書局も、日本の教科書作りのノウハウを踏襲し、近代的教科書のベースとして次第に定着させたことを立証した。また、この矛盾の原因は、民国初期の教育界の理想としての欧米の志向と現実としての日本の実践という二律背反にあることを指摘した。

第四章の前半は、民国初代教育総長蔡元培の教育方針を手がかりに、「教科書革命」のスローガンを掲げた中華書局の看板シリーズ『新編 中華修身教科書』(1913)を中心に取り上げ、日本国定一期、二期修身教科書、及びライバルの商務印書館の『共和国教科書新修身』と比較して、民国以後に生じた日本モデルからの離脱の動向を指摘した。後半では、その背景、原因について、梁啓超著「新民説」(『新民叢報』1902.2 - 1906.3)に端を発して20世紀初頭から中国に広がった「国民性改造」論との関連を具体的に検討した。つまり、民国初期の修身教科書は欧米的教育理念の牽引力によって日本モデルを離れ、「国民性改造」という内部からの推進力によって、近代化の焦慮と民族主義のアンバランスな状況の中で困難を極めつつ、近代化と中国的独自性を探ろうとしていたといえる。

イギリス映画産業の「第三の道」： ブレア政権時のクリエイティブ産業政策をめぐる歴史

木村 めぐみ (一橋大学イノベーション研究センター特任助手)

本研究の目的は、ブレア政権時(1997年から2007年)のイギリスの映画産業(を含むクリエイティブ産業)に焦点を当て、イギリス映画産業史とイギリス史全体からその「戦略」を読み解くことである。

●第一章：イギリス映画産業の「第三の道」：

＜ハリウッドへの対抗と依存の歴史＞

イギリス映画産業の歴史は、政府対ハリウッドの関係によって多くのことを読み解くことができる。トニー・ブレアのいう「第三の道」は、過去の労働党(「第一の道」)、サッチャー、メジャーによる18年間の保守党時代(「第二の道」)を踏まえており、ブレア政権時の映画産業もまた同様であった。まず、1927年シネマトグラフ法によって導入され、アメリカ映画の輸入の制限を目的とした「スクリーン・クォータ制度」(配給、興行の割当制度)、国内の製作者を資金面で支援するナショナル・フィルム・ファイナンス・コーポレーションやイーディ税を撤廃したのが、サッチャー政権期半ばに施行された<1985年映画法>である。その後、今日までのイギリス映画産業の重要な資金源である「国家宝くじ」が導入されたのがメジャー政権時だ。こうした経緯からすると、ブレア政権時の映画産業をめぐる政策のほとんどはしっかりとその「歴史」を踏まえたものといえ、注目すべきはその新しさの「意味」であって、ブレア政権による巧みなメディア戦略に隠された「意図」だろう。

●第二章：イギリス映画の「第三の道」：

イギリス映画産業の「二つの国」

イギリス映画産業には「富」と「貧」、あるいは「アメリカ」と「イギリス」という二重の意味での「ふたつの国」が存在した。たしかに政府はハリウッドに対して「対抗心」を示してきたが、制作者たちは必ずしもそうではなく、産業全体としてみても、ハリウッド・マネーに依存しなければならない事情もあった。アルフレッド・ヒッチコックが多くの「不満」を書き残してくれたように、イギリス映画産業は(ハリウッドに対して)厳しい検閲、人材や資金の不足、不安定な天候などさまざまな問題を抱えてきたが、彼の死後、サッチャー、メジャー政権時の政策はそれらを解決するものだったといえる。その「制度」などを踏まえたうえでブレア政権時の映画産業が経験した最大の変化こそ、映画産業に存在してきた「ふたつの国」の「統一」である。

●第三章：クリエイティブ産業としての映画産業：

「クール」・ブリタニアの歴史的考察

トニー・ブレアは自らを「国の統一者として売り込もうとしていた」と語っており、そのために必要だったのが「自由の精神」である。ブレア政権時のクリエイティブ産業をめぐる強化宣言とも呼べる、「クール・ブリタニア」ということばは、1740年に誕生した「ルール・ブリタニア」という曲に由来し、その誕生背景を辿れば、「自由」「統一された国家」「帝国」というキーワードが思い浮かぶ。さらには「ルール・ブリタニア」の制作を依頼したフレデリック皇太子(ジョージ3世の父親)や作詩者ジェームス・トムソンとトニー・ブレアの共通性を考えると、映画産業を含むクリエイティブ産業を強化することが「統一された国家」のために必要不可欠であったこともわかる。ベネディクト・アンダーソンのことばを借りれば、「想像の共同体」ならぬ、「創造の共同体」が目指されていたのだ。

●第四章：ブレア政権時の映画産業の「グローバル」戦略：

デジタル時代における世界の映画の中心へ

ブレア政権時の2000年に設立されたフィルム・カウンシルは、「デジタル時代における世界の映画の中心へ」という目標を掲げた。イギリスの歴史を遡っていけば、この目標にはアメリカの独立宣言との類似性を見出すことができる。植民地時代のアメリカでは、「紅茶」を通してイギリス化、脱イギリス化、そして、アメリカ化が起きたというが、イギリスにおける「映画」の存在は、植民地時代のアメリカにおける「紅茶」の存在と似ていたと考えられる。イギリス映画産業の歴史を俯瞰してみれば、まずハリウッド化が起こり、脱ハリウッド化の動きがあって、ようやく「イギリス化」が実現されたのがブレア政権時だったのであり、それを象徴するのが「デジタル時代における世界の映画の中心へ」という目標であり、「クール・ブリタニア」ということばである。

幕末・明治初期における「諫言」の変遷と終焉 —下級武士の忠誠観を中心に—

頼 鈺菁 (日本語文化専攻比較日本文学講座 博士後期課程 2013年博士号取得)

1. 研究目的

本研究は、中国(儒学)から受容し、江戸時代の武家社会で忠誠精神を代表する概念として形成された「諫言」が、政局が不安定になった幕末期において、下級武士たちによっていかに受け継がれ実行に移されたのか、また、その過程でいかなる概念に変容したのかを考察したものである。

江戸時代における諫言は、武士のエートスと結び付いて、「忠誠」と同一視される傾向が強かった。嘉永六年(1853)のペリーの来航は、幕府を対外問題に直面させただけでなく、同時に日本国内においても内部分裂を引き起こした。この時期に、のちの明治維新の担い手となった下級武士たちは、志士として「ダイナミック」な諫言精神を発揮し、日本を近代国家へと前進させた。本研究は、この動乱期において、志士としての下級武士の諫言精神がどの程度まで革新的、あるいは近代的であったのか、また、彼らがおお封建的思惟に拘束されていたとすれば、それはいかなる点であったのかを探求するとともに、この動乱期における「諫言」の内実的变化を併せて考察することを目的とした。

2. 各章の構成と概要

本研究は序章、終章および次の五章から構成されている。まず、第一章では、江戸時代における武士の忠誠意識を中心に検討を行った。分析対象とした『葉隠』(1716)を通して、武士は諫言を畳の上の御奉公における最高の忠誠と認識していたことを確認した。また、『葉隠』、及び同時代に起きた赤穂事件を併せて検討することにより、当時の武士の「滅私奉公」観に、主君に対する個人的な情念と御家に対する理性的な忠誠観が共存していることを明らかにした。

第二章では、「御家」に奉公する武士の「ダイナミック」な忠誠を代表する諫言の精神がもっとも顕著に発揮された幕末期に焦点を当て、ペリーの来航後、政局が次第に不安定化した幕末において、志士となった下級武士たちの諫言精神が、中国の士大夫のそれと比較して、いかなる特徴を有していたのかについて、吉田松陰(1830～1859)を中心に考察した。特に、松陰が中国の忠臣の志気や行為をいかに解釈し、評価したかを検討することにより、儒学から受容した諫言の概念が、幕末において革新的な「死狂い」的諫言精神へと発展したことを指摘し、その過程を論述した。

第三章では、志士たちのこの「死狂い」的諫言精神が、尊王攘夷運動においていかに発揮されたのかについて、長州藩の久坂

玄瑞(1840～1864)、及び佐賀藩の江藤新平(1834～1874)を分析対象として検討し、幕末期における下級武士たちの狂的諫言精神には、旧来の封建的な考え方と革新的な理念が並存していることを明らかにした。

第四章では、幕末期における「諫言」及び「建言」/「建白」という漢語表現に注目し、「諫言」の封建的性格、洋学の影響による近代的政治体制への指向などと関連づけて考察した。江戸時代に定着した「諫言」には、本来的に武士という社会的身分階級に特有の精神が強く込められていた。幕末に社会変革の機能を果たした「諫言」精神は、その後次第に同じような意味合いをもち、しかも階級的ニュアンスを含まない「建言」や「建白」などの語に取って代わられた。この現象を時間軸に沿って検証し、「諫言」精神がその役割を終えたこと、新たに提唱された「建白の世」は、全国国民が社会の主体となるべき四民平等の時代、文明開化の時代への変化を物語るものでもあったことを明らかにした。

第五章では、幕末の志士たちの一部が下級武士から中央政府の官僚に転身した後に、近代国家の成立過程で、なぜ最終的に脱落することになったのか、という問題に焦点を当てて、江藤新平をその代表例として考察した。江藤の思想に、儒学の東洋士大夫的禁欲に根ざした強固たる道德観、武士固有の金銭蔑視観、また農商すなわち民衆の蔑視という武士意識を検証することにより、彼が「建白の世」の近代国民国家を作り上げようとする明治政府の路線と最終的に無縁の、過渡期の人物であったことを指摘した。

3. 本研究の達成点

幕末期の「諫言」を主な分析対象とした本研究は、従来の江戸時代に限定した断片的「諫言」像を補完し、「諫言」の全体的輪郭を明確にしえたと考えられる。さらに、諫言、そしてその延長線上にある建言・建白を武士の忠誠心との関連で時間軸に沿って考察することにより、封建的身分階級と緊密に結びついていた「諫言」から、万民に開かれた「建言」/「建白」への用語の変化は、日本が近代社会へ踏み出した第一歩と位置づけた。この指摘は明治維新イデオロギー史の一側面に新たな光を当てるものといえる。

官約移民「後藤潤」像の変遷—ハワイ日系社会黎明期の記憶をめぐって—

堀 江里香 (国際多元文化専攻アメリカ言語文化講座 博士後期課程 2012 年博士号取得)

1. 本論文の目的

本論文は、19世紀末に官約移民としてハワイに移住した後藤潤(1862-1889)の記憶の長期的変遷を明らかにし、特定の個人やコミュニティがその記憶を読み替えてきた歴史的過程を検証するものである。官約移民とは、ハワイ王国の国王の要請のもと日本政府の斡旋により1885年から1894年まで砂糖黍プランテーション契約労働者としてハワイに移住した日本人移民を指す。

後藤はハワイ島ハマクア地方の砂糖黍プランテーションで3年間の契約労働を終えた後、官約移民として初めてホノカアの町に商店を開いた。しかし、1889年プランテーションの白人監督や白人商店主らによってリンチ殺害され、電柱に吊り下げられた死体となって発見された。その事件から70年以上が経過した1966年、後藤の墓地が地元の日系人により修築され、これを契機に長い間風化の一途にあった後藤の歴史を読み直す動きが始まった。1994年にはホノカアのリンチ跡地付近に後藤を顕彰する記念碑が建立され、さらに21世紀初頭には後藤の歴史をもとに戯曲や漫画が制作された。

日本人の海外集団移住が活発に行われる契機となった官約移民を対象とした従来の研究では、砂糖黍プランテーションで白人資本家のもと契約労働者として働いた彼らの奴隷的境遇や官約移民制度の背景が明らかにされてきた。しかし、官約移民の記憶の掘り起こしや記念のされ方に焦点を置いた研究はほとんどなく、後藤リンチ事件に関する先行研究も、裁判記録を用いて事件の背景を探ることに集約されている。これに対し、本論文では、後藤を記念した組織や個人の文書、書簡、演説や筆者が行ったインタビュー等を分析し、特定の個人やコミュニティが後藤の歴史をいかに記念しようとしたのかを明らかにした。また、記念碑建立後に後藤の歴史をもとに創られた戯曲や漫画の表象も分析し、リンチ事件後から21世紀初頭までの後藤像の長期的変遷について検証した。

2. 各章の概要

第1章では、後藤の記憶が1960年代半ばまでにほとんど風化していた歴史的背景について述べた。白人を頂点とする人種主義社会や第二次世界大戦中の戒厳令の影響等でリンチ事件を知る日系人の古老たちが沈黙を守ったため、殺害現場のハマクア地方でさえ事件の記憶は風化の一途を辿っていた。

第2章では、1960年代後半から始まった記憶の掘り起こしの動きについて述べた。ハマクア地方では、日系人を取り巻く社

会状況の変化やエスニック・リバイバルを背景に沈黙が破られた。また、アメリカ本土西海岸の労働運動家は、アイデンティティ・ポリティクスに基づき日系やアジア系のフォークヒーローとして後藤の歴史を可視化しようとした。

第3章では、1970年代から80年代にかけて日系移民遺産として後藤を顕彰する動きが進行した点について述べた。ハワイでは、エスニック多元主義の影響で日系アメリカ人史に光が当てられるようになり、散逸の危機にある日系移民遺産を継承する組織的取り組みも始まった。世論を喚起すべく日系組織や労働組合、政治家等が集結し1985年に遂行された追悼式典は、ハマクア地方で後藤を記念する活動を加速させることになった。

第4章では、1994年に建立された記念碑の碑文における後藤の位置付けと記憶のポリティクスについて検証した。1世紀以上続いた砂糖黍産業が終焉を迎える中、後藤潤記念碑委員会は、後藤が砂糖黍プランテーション時代のローカルの労働者たちの誇りとして記憶されるべき人物であると強調し、この計画のために様々な人種エスニック背景をもつ人々が協力した。コメモレーションに至る過程で注目されるのは、当初日系移民遺産として掘り起こされたエスニックな記憶が、日系という枠組みを超え、プランテーション時代の人種や階層意識と接合したハワイのローカルの記憶と交錯していった点である。

第5章においては、2000年代に制作されたフィクションにおける後藤像を検証した。戯曲には、植民地化されたハワイ先住民の視点を交えてポストコロニアルな視点から事件を読み直す試みが見られた。そこでは、後藤が、白人による人種差別と搾取に立ち向かった英雄であっただけでなく、先住民社会を乱す入植者の一人でもあったとする新たなイメージが提示されたのである。

3. 本論文の結論

本論文では、後藤潤像の長期的変遷の検証を通し、その過程にアメリカ本土のアイデンティティ・ポリティクス、ハワイの日系移民遺産継承やローカル意識の共有、ハワイ先住民運動の高揚等を反映するいくつかの異なるベクトルが含まれていたことを指摘した。そして、多様な人種エスニック集団が対立やせめぎ合いの歴史に折り合いをつけながら境界横断的な関係や連帯を紡いできたハワイ社会の一端に光を当て、人種エスニシティと階層意識に纏わる記憶の交錯を明らかにした。

Givers in Exile: Americanization, Gender, and Reciprocity in the Works of Anzia Yeziarska

本田 安都子 (国際多元文化専攻アメリカ言語文化講座 博士後期課程 2012年博士号取得)

本研究は、主に1920年代に活躍したアメリカのユダヤ系移民作家アンジア・イージアスカの作品を「贈与」という視点から読む試みである。イージアスカは、その著作を通じ、旧世界的価値観と新世界的価値観の間で揺れ、どちらの世界にも帰属できないユダヤ移民の心情を描いてきた。そのようなユダヤ移民を描く際、イージアスカが「贈与」を重要なモチーフとして使っている点に本研究は着目した。イージアスカ作品における「贈与」を論じる際、従来の研究の多くでは、アメリカの上・中流社会による慈善活動に対するイージアスカの批判にばかり論が集中していたが、本研究は、ユダヤ移民によるアメリカ社会参入の過程の中で、旧世界的な贈与の伝統がいかに改変され、あるいは生き残っていくのか、という観点からイージアスカ作品における「贈与」を論じた。よって、本研究の独自性は、従来の研究ではあまり注目されていない、ユダヤ移民による贈与に着目してイージアスカを論じたという点にある。

イージアスカの作品の読解から明らかになったのは、イージアスカは、贈与を一方的な行為と考へ、交換と対立するものと見なしていたということである。これは、ユダヤの伝統的贈与観を反映している。ゆえにイージアスカは、旧世界を「贈与的世界」として描き、新世界を贈与と対立する「交換的世界」として描いている。また、旧世界と新世界の対立は、旧世界的贈与の伝統を反映した相互依存・扶助の慣習と新世界的自助・自立の精神という対立としても描かれる。本研究の第1章から第3章では、イージアスカの描くユダヤ移民が、旧世界から新世界へ移行する過程の中で、どのようにしてこれらの対立する価値観の間で葛藤し、帰属する場を見出すのかを明らかにした。第4章では、それらの価値観の対立をジェンダーとの関連から論じ、第5章では、移民作家としてのイージアスカとジョン・デューイとの贈与的關係をイージアスカの帰属意識との関連から論じた。

第1章は、短編集*Hungry Hearts*収録の作品を取り上げ、そこに見られる贈与とアメリカ化との関連を考察した。これらの作品においてイージアスカは、旧世界と新世界の対立を「贈与」と「交換」の対立として描き、アメリカ化の過程で「旧世界=贈与」は忘却される運命にあることを、「旧世界の贈与物を売却する」というユダヤ移民の行為に託して描く。さらには、そのような売却行為は「贈与物=旧世界的自己」の「殺害」になぞらえられる。このような、旧世界の贈与物を売るという行為の描写の背後には、移民がアメリカ社会へと組み込まれていく過程に払われる「代価・犠牲」を描こうというイージアスカの意図があるのだという指摘を行った。

第2章では、*Salome of the Tenements*に描かれるユダヤ移民ソーニャの社会的上昇の過程において、贈与的世界から交換的世界への移行がどのように描かれているのかについて考察した。特に、男たちとの「交換」行為を介してなされていくソーニャの社会的上昇の根底には、ユダヤ的贈与の伝統による教えが存在しているという点に着目して分析を行った。

第3章では、*Bread Givers*を取り上げ、その中に見られる、旧世界的贈与の伝統と、新世界的自助・自立の精神が、いかにユダヤ移民の中で混じり合い、彼らのアメリカでの生活、および社会的上昇の過程に影響を及ぼしているかを考察した。

第4章は、*Arrogant Beggar*における旧世界的贈与の伝統の回復について、ジェンダーの問題との関連から論じた。この作品においてイージアスカは、贈与を受け取った者が第三者に贈与することによって、自らの受けた贈与に報いるという「系列的互酬性 (serial reciprocity)」を主人公のユダヤ移民女性アデルに実践させることによって、ユダヤの伝統に忠実な贈与の形を提示すると同時に、主人公の自立と新世界におけるユダヤ的贈与の回復の物語を通して、ユダヤの伝統的男女役割観からは逸脱したユダヤ移民女性の贈与のあり方を模索していることを指摘した。

第5章は、*All I Could Never Be*と*Red Ribbon on a White Horse*を取り上げ、イージアスカと、彼女が師と仰ぎ、短期間ではあるが恋愛関係にあった哲学者・教育者ジョン・デューイとの間に見られる異文化間の贈与的關係に着目し、そのような贈与的關係が、ユダヤ人／女性作家としてのイージアスカの帰属感覚とどのように関わっているのかについて考察した。

結論として、次の2点が挙げられる。ひとつは、イージアスカは旧世界と新世界の対立を「贈与」と「交換」の対立ととらえ、ユダヤ移民のアメリカ化や社会的上昇の過程で「贈与」は「交換」に飲み込まれ、打ち負かされる運命にあると考えていたという点である。もうひとつは、アメリカの交換経済の波にのまれようとも、「贈与」という概念の中に、ユダヤ移民の帰属感覚を支える価値観をイージアスカが見出そうとしていたという点である。

「知っているのに使えない？」 日本人の英語を科学する ～日本人・フィリピン人・韓国人との比較から～

山田 貴将

(国際多元文化研究科 英語高度専門職業人コース M1)

英語習得に関して、「日本人は文法や語彙の知識は豊富だが、何年学習しても使えない」という類のことは、誰もが耳にタコができるほど聞いていることだろう。果たして、その通説は事実なのだろうか。また、日本人だけが英語を使えないのだろうか。

知識は、意識的で分析的な明示的知識と直感的で自動化された暗示的知識に大別できる。多くの先行研究で、日本人の英語知識は、明示的知識の量に比して暗示的知識の量が少ない点を実証されてきた。英語を使えるという状態を、ある一定レベルの流暢さで運用できる状態とするならば、運用をつかさどる規則や体系が個人の内面に宿っていなければならない、即ち、暗示化されていなければならない。そのような観点に立つと、明示的・暗示的知識の差をいかに少なくしていくかということが非常に重要になる。

そこで、私は、日本人英語学習者を対象に、筆記文法性判断テスト(制限時間なし)によって明示的の文法知識を、又、cued sentence-based oral production task(PCを用いたヒント付きの文章レベルでの口頭再生タスク:制限時間あり)によって暗示的の文法知識の量を測定し、二者の知識間の差を統計的に明らかにする。更に、フィリピン人と韓国人にも同様の実験を行い、国ごとによる差を統計的に分析する。

その上で、各国にける明示的・暗示的の文法知識の差を生じさせている要因について、主に社会・教育制度及びそれに伴う学習環境等の視点から考察し、そこから得られる知見を基に指導法への提言にもつなげていきたい。

研究成果を何らかの形で現場での実践に活かしていくことは、高専人に課せられた重要なミッションであろう。現場にはびこる経験主義や自らの体験に基づく直観の罠にはまることなく、「英語を科学する」にはどうすべきなのかを問い続けながら、我々高専人は、今日もキャンパスと現場を往復するのだ。

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 年報 Bulletin L&C 2013 vol.5

2013年10月20日 発行

編集発行：就職・同窓会委員会

福田 真人（日本語文化専攻日本語文化学講座教授 / 研究科長）
玉岡賀津雄（日本語文化専攻日本語教育学講座教授 / 評議員・副研究科長）
飯野 和夫（国際多元文化専攻多元文化論講座教授 / 副研究科長）
井上 公（日本語文化専攻応用言語学講座教授）
伊藤 信博（日本語文化専攻助教）
楊 韜（国際多元文化専攻助教）

〒464-8601 名古屋市千種区不老町
URL：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/>

制作：西濃印刷株式会社

〒500-8074 岐阜市七軒町15番地 TEL：(058) 263-4101

